始

263-174

目と耳の教育

栗山周一著

第一部 耳の教育

東京神田
大同館藏版

大正
11. 6. 22
内交

自序

輓近、社會の進歩に伴つて、我教育界にも種々新しい問題が論議されるやうになりました。しかしその大部分は水泡の様に、浮いては消え浮いては消えして、全く流行の様に、教育界の表面を輕くさらさらと流れてゆきます。しかしその流れてゆく水泡の中には、隨分に貴重な寶玉も數ありながら、何等の深い洞察も研究もなく、唯一時的に教育界に螢光を淡く投げるだけで、パッと光つては哀れにも消えてゆくのであります。其のやうな處に深刻な自由教育も高尚な藝術陶冶も決して發生するものではないのであります。

最近盛に論議されました自由畫の問題や自由教育の問題は、確に重大なる意義ある教育説として教育者に甚大なる考察の餘地を與へて居ります。此の大問題については、教育者は眞劍に洞察もし研究もしなければならないと思ひます。水泡の様に惜しげも

なく、輕くさらさらと流してしまふ事の出來ない重大な問題であるとおもはれます。

私は、教育の殆んどすべてが愛の問題ではあるまいかと思ひます。教育者が兒童生徒に對する際は勿論、督學官や長官など言ふ教育行政官が教育者に對する時なども、愛をヌキにして果して如何なる教育的の價値をさめることが出來ませうか。愛をヌキにして教育が果して成り立つでありませうか。

私は教育の仕事は藝術であるとまで極論致したいのであります。之には異論もあらうと思ひますけれども、藝術味のない教育者が我日本の國に、何人ゴロゴロして居つても生きとし生ける人間の子供を教養する事は絶對に出來ないと私は斷言致します。

藝術教育は之を換言致しますれば目と耳との教育であります。藝術のみならず、教育の殆んど總ては目と耳とに依つてなさるるものではありませんか。目と耳とは教育上實に重大なる問題となるのであります。

私はかゝる私の考を書物にまとめ度ひと思つて居りましたが遂に今日まで其の機を得ませぬでした。處が先年秋少暇を得ましたから雜記帖に整理して見ました。本書は其の一部分であります。しかし決して體系だとか系統だとか言ふ事はぬきにして私の心に浮ぶまゝを書き流して見ました。唯澤山な實際教育上の問題から、問題とするに足るものだけを拾ひ集めました。此處に拾ひ上げた要項中にも隨分に重大な教育問題があらうと思ひます。しかしそれ等重大な問題について、本書は一々解決を與へようとするものではありませぬ。又その樣な大仕事は一朝一夕に出來ようとも思ひませぬし、本書の樣な小冊子の到底よくすべき處ではありませぬ。唯私の考を忌憚なく述べて、實際教育家の御批判を仰ぎ度いのであります。どうか御判讀の上は、本書に限りませず、私の前著についても、十分なる御垂教を賜はりますするならば、著者の光榮とするところであります。

本書は「目と耳との教育」の第一部「耳の教育」であります。近い内には第二部「目の教育」を出版する運びとなつて居ります。尙私の力と時間が許すならば、第三部と

して一般の「藝術教育」について私の鄙見を述べて見たいと思つて居ります。

末筆ではありますが、私が本書を起草し出版するにつきまして常々多大な援助を賜はりました、大同館主阪本眞三氏に對して、私は衷心より感謝する者であります。

京都東山神樂岡にて

著者識

"Beauty is truth, truth beauty."
that is all ye know on earth, and
all ye need to know. (KEATS)

目と耳との教育

第一部　耳の教育
第二部　目の教育
第三部　藝術教育

目次

（第一部＝耳の教育）

第一章　愛は教育の總てである……一
第一　生きとし生けるもの……一
第二　音樂は愛の聲……一六
第三　愛は至高至上……三五
第四　生ける道德教育……四三
第二章　天使の聲……六六
第一　子供の世界は神曲の園……六六
第二　子供は卽興詩人であり音樂家である……八九
第三章　音と色との綜合藝術……一〇一

目次

第一　ネ(音)とオト(音)と……一〇一
第二　音の色と色の音……一一〇
第四章　耳の開鑿……一四五
第一　樂人の舟……一四五
第二　耳なき國民……一五四
第三　耳の教育の不振……一六三
第五章　學校の唱歌……一七九
第一　樂器の悲鳴……一七九
第二　唱歌教室……一九八
第六章　生命の March……二一二
第一　Chor and Solo……二一二

第二　聽唱と視唱、本譜と略譜、及びトニックソルファー……二三五
第七章　悲慘なる Melody……二九八
第一　奴鳴る教科叫ぶ學科唸る時間……二五八
第二　唱歌を他の知識教科の奴隷とするなかれ……三一一
第八章　個性の Expression……三五八
第一　踊れ歌へ……三五八
第二　聞く事の教育……三七九
第三　子供の自由作曲と作謠……四〇一
第九章　節奏　旋律　和絃……四二二
第一　Rhythmus……四二二
第二　Melody and Harmony……四三一

第十章　耳の教育としての餘論……四四三
第一　唱歌の教材……四四三
第二　時間表より見たる耳の教育……四五四
第三　學校唱歌と家庭……四五七
第四　唱歌劇……四六九

〔挿入版畫〕
バデレウスキー（寫眞）
いの字いつさいこく（著者採譜）
阿波の鳴門（著者採譜）
尻取歌（著者採譜）
數へ歌（著者採譜）
大文字（寫眞）
京の大佛（著者採譜）
耳の開鑿（Arthur Elson. 氏に依る）
詠歌（村岡博士に依る）
唱歌教室のプラン（著者原圖）
音附の部分（著者）
和音難聽表（著者原圖）
男女肉聲の範圍（著者原圖）
男女音域（山田耕作氏に依る）
外國兒聲域圖（著者原圖）
日本兒聲域圖（著者原圖）
蓄音器にての體操（From Catalogue of Victor Records.）

蓄音器にてのダンス(From Catalogue of Victor Records.)
メトロノーム(著者原圖)
村の鍛冶屋(尋常小學唱歌)

目と耳との教育

(第一部　耳の教育)

栗山周一著

第一章　愛は教育の總てゞある

第一　生きとし生けるもの

フイウメに飛んで勇壯な働きをした飛行機の操手は詩聖ダヌンチオである。ポーランドの大統領は世界第一のピアニスト、パデレウスキーではないか。「花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲聞けば、生きとし生けるもの何れか歌を讀まざりける。」實にや力をも入れずしてあめつちを動かし、目に見えぬ鬼神をも哀れと思はせ、男女の仲をも和ら

げ、猛き武夫の心をも慰さめるのは歌である。人の心を種として萬の言の葉より成つたものは「みそもじあまりひともじ、」のみではない。ベートーフエンやハイドン、モツアルトのソナタは申すに及ばず。ミケルアンゼロの彫刻は一個の堂々たる無言の音樂であり、ベルサイユ宮殿の壯重なる建築は一個の立派なソナタではないか。軒より落つる雨だれも音樂であれば、秋の夜長をなき通す蟲のあはれより、清くすみ渡つた青い月の光に至るまで、ソレが音樂でなくて何であらう。

たのしい時にはたのしい思ひを、戀しい時には戀しい思ひを、かなしい時にはかなしい思ひを歌ふのである。我々の小さな胸にはいつも無言の音樂のメロディーが高鳴つて居るのである。「所かはれば品かはる」と言ふが、地方々々には各々特色のある地方民謠に立派なメロディーが殘つて居り、風俗や職業によつて或はベニスのゴンドラの歌となり、ボルガ河の綱引の歌となつて居る。宇治の茶摘みの歌ふひなびた歌より、山陰の漁夫の口ずさむ安來節に至るまで、所かはれば品かはつて面白く傳へられて居る。一歩人間の世界を離れて、秋の夜長をなきとほす蟲のあはれを思ふ時、ソコには吾々人間が恥しい樣なリズムやモチーフがくり返されて居り、立派なハーモニーが出來て居るのである。まことに自然は立派な音樂なのである。若し此の雄大なる大自然から是等を取り去るならば、其處には如何に落寞寂寥なる天地が出現する事であらう。

米國の大統領は代々美聲の所有者だと聞いて居る。只に米國の大統領のみではない六國の形勢を意の如く左右した蘇秦張儀も、事理徹底の辯舌のみでは衆人を納得させる事は出來ない。偉大なる政治家は各々波瀾順挫抑揚曲折の美聲を持つて居ればこそ滿堂の聽衆をして手に汗を絞らせる事が出來るのである。深沈たる故柳踈槐のもと、かしはでの音神々しき神官の祝詞も、善男善女を隨喜の涙にむせばしむる僧侶の讀經も、ソレが立派な音樂であればこそ人の心を動かし鬼神をも泣かしめる力があるのである。まことに音樂は宇宙の生命であり、自然の哲學である。

天地自然の大音樂は到底吾々人間世界に於ける如き貧弱なものではない。ゲーテのファウストの天上の序言には天使の長三人進み出て自然の音樂を讃めたゝへて居る。

「昔の儘の節博士で、同胞の星の群と、日は合唱の音を立てゝ居る。」まことに日月星辰は夜毎々々に吾々の頭上鴻大無邊のオーゲストラを奏でゝ居るのである。濱の松風岸打つ波、梢ふく嵐に谷川の水、夫呼ぶ雉子のケンケンホロゝウはもとより、牧羊の神パアンの笙の音に至るまで、如何に大自然大宇宙の音樂が壯重であり優大であるかよ。まことに上田敏氏の「牧羊神」に聞け。

阜の上の森蔭に直立ちて、
牧羊の神パアン笙を吹く。
晝下り、日暖に、風も吹きやみぬ。
天青し、雲白し、野山影短かき、
音無しの世にたゞ笙の聲、
ちょう、りょう、ふりょう、
ひうやりやに、ひやるろ、
あら、よい　ふりょう、るり、
ひょう、ふりょう、
蘆笛の管の異、
震ひ響きていづる音に、
神も昔やおもふらん」。（牧羊神）

實にや夫呼ぶ雉子の雌鳥も、胡桃に耽ける友鳥も、原ににれがむ黄牛も、牧に嘶く黒駒も、埒にむれ居る小羊も、聞き惚れ見惚れあこがれるであらう。悠やかに、朗らかに、緩やかに牧羊の神パアンの笙の音は、ろえうちり、たちえろ、谷の八十隈谺にひゞき、夕邊の空の飽なるに、縹色なる星の群にまでも力强く、玉玲瓏にひゞくのである。

大自然の音樂は到底我々の筆や紙に現はすべく大きすぎる。貧弱な人間の言葉や文章に現はすにしてはあまりに壯重である。自然の雄大な大音樂を讃美するにしては人間の世に言葉がない。今は一歩退いて人間社會に於ける音樂的の世界を考へて見度い。

歌を詠むと言ふ事は聲をたてつゝ歌を歌ふ事なのである。「詩」とは言扁に永と書く言葉を永く引く事なのである。言葉を永く引く事は歌ふ事なのである。「歌は作るものでなくて詠むものだ。」とは昔から傳へられた歌人の金言である。詩聖ゲーテは「詩、我を作る。我、詩を作らず。」と言ひ、又「我は詩の爲に玩ばる。」尙又「我は鳥の歌ふ如くに歌ふ。」などゝ言つて居るのも同じ意味である。ベートーフエンやハイドンのソナタも決して作つたものではない。精神から自然と流れて出た感情の聲である。酒聖太白も作つたのではない。決して作つたものと解する事が出來ぬ。皆ソレ自身が一のメロディーとして出來上つたものである。詩には韻と言ふものが入つて出來上る。此の韻とは堂々たる一個の立派なメロディーである。詩に限らず總て我々が日常使用して居る言葉のアクセントも一のメロディーを成した音である。漢字に反切と言ふものがある。之が一の音をあらはす。又漢詩の平仄も同じくメロディーである。曲である。

西洋の詩にも韻律がある。ソレは漢詩と同じく決して不思議な事ではない。西洋の詩も漢詩も共に音樂である。立派なメロディーなのである。

Prosody. と言ふ事は希臘語の Prosodia. から出た言葉で、詩の Metre. や Rhyme. や Stanza. など言ふ事は一個の音樂的の名稱である。私は此處に漢詩や英詩、又は大和歌などの說明をしやうとする者ではないが、言葉そのものが一個の堂々たるアクセントとリズムの構成なる以上、ソノ言葉によりて生みなされたる詩歌が音樂なる事は私が今此處に事新しく說明する必要はあるまいと思はれる。

で、歌――音樂――は、「何れか歌を詠まざりける。」で決して三十一文字のみではない。詩と歌とを區別して見たり、規則を作つて自然の精神の流れをセキ止めてみたりする事は決して藝術的見解を以てして良い事だとは言ひ得ない。虞書に「詩は志を曰

ひ歌は言を永うす。」とあるが要するに歌も詩も同じものなのである。樂しい時には樂しい思ひを歌ふのが音樂なのだ。戀しい時に無言でなつかしみを胸に起すのは無言の音樂である。小さき私の胸には、いつも無言の音樂のメロディーが高鳴つて居る。我々が平常これは音樂だと少しも意識して居らない方面に、隨分澤山音樂的の要素が働いて我々の生活を助けつゝあるのである。

我々が幼少なりし頃を内省して見る。母の溫き腕に抱擁され、或は子守の背におんぶされつゝ樂しい子守歌を聞かされたものである。幼けき當時にあつてはそれがシューベルトの子守歌よりも、ブラームスの子守歌よりもなつかしき思ひ出である。再びかへらぬ幼けき頃は今に只子守歌のメロディーのみが耳底かすかに響くのである。

ねんねしなされおやすみなされ、朝は早うから起きなされ起きなされ。
ねたら丹波へ起きたら山へ、めゝがさめたらお江戸までお江戸まで。
わが子可愛けりや守可愛がれ、守のにくさが子にあたる子にあたる。

守がにくいとて破れ傘きせて、可愛いゝ我子のそでぬらすそでぬらす。
ねんねする子に羽子板と羽子と、ねんねせぬ子にや羽子ばかり

大正十一年一月一日の大阪朝日新聞に相馬御風氏が流暢な筆で「聽雪雜記」と言ふ趣味ある記事を登載されたのを拜見した。その冒頭に私が常々考へて居た事と頗る一致する、と言ふよりも私の此の記事の證明としてまことにふさはしい資料が傳說の内から發見されるのである。今氏の美しい文章の一部を此處に拜借して抄記して見る。

甲州のある地方に語り傳へられて居ると言ふ「音頭のお高」と言ふ傳說を私は時々思ひ出す。昔甲州の或る山の中の村にお高と言ふ娘があつた。お高は顏ぢう痘痕だらけの醜い女であつたが不思議な事には天性美しい音聲の持主であつた。

そしてその天賦の美聲は長ずるにつれて彼女を歌うたひの名手たらしめた。お高の歌ふ唄聲を聞くとどんな荒くれ男でも心を和らげずには居られなかつた。たまたま村の内に邪慳な心を起すやうな者があつたりしてもお高の歌ふ歌聲が聞えて來る

と、その人はいつとはなく、又何と言ふわけもなく氣持が和らいであたゝかな心になつた。

ところが或る年の事その附近を流れてゐる大きな川の堤防工事が營まれた。多勢の若い男達が毎日々々そこに集つてその困難な仕事に從つて居た。處が日が重なるにつれて人々はその困難な單調な仕事に倦いて來た。そして仕事が一向にはかどらなくなつた。世話役の人々が氣を揉んでどんなに勵ましても一旦倦怠しはじめた人人の氣持は少しも引き立たなかつた。

困りぬいた結果世話役達は一つの妙案を案出した。それはかの歌の名人であるお高を頼んで毎日その工事場に來て唄を歌ひ音頭をとつてもらふ事であつた。人々の依頼に初めの内はどうしても應じなかつたが再三再四の切なる頼みに彼女も遂に「それでは」と言ふ事になつた。或る日の事であつた。川原普請の人足達が例によつてだれ切つた體を不精無精に働かせて居る折も折、どこからともなく何とも言ひ様のない快よい唄聲が夏の夕風のように彼等のつかれた心に玲瓏とひゞいて來た。そして不思議にも綿の様になつて居た彼等の體に初秋の朝のそれのやうな、すがすがしい爽やかな緊張を與へたのであつた。かうして世話役達の畫策は豫想以上の成功を得た。倦怠は緊張に變つた。苦しみは歡びに變つた。日一日と減少するばかりであつた人足の數が反對に日一日と殖えるばかりになつた。そしてさしもの工事も見る見るすばらしいはかどり方を示した。

處が知慮の淺い世話役達はかうなつてくると又迷ひ出した。こんな風に無暗と人足の數が殖えてゆくとしまひには又困つた事が起りはせぬか？　こんな事を彼等は又危みはぢめた。そればかりでなく彼等は自分達の妙策がうまく功を奏したのを見て、とつて、もういゝ可減お高の歌がなくても大丈夫だらうと思つた。いつまでもお高の歌の力で仕事をさせて居ては自分達の面目が立たぬ、自分達の功績が認められなくなるとも考へた。そこで彼等は遂に思ひ切つてお高をことわる事にした。

しかし彼等の豫想はまるで間違つて居た。一たびお高の唄聲が聞かれなくなると同時に僅一二日にして工事の狀況は再び初めの不振狀態に戻つてしまつた。しかもそこには以前よりも一層おそろしい倦怠があつた。世話役たちは此の有樣にひどく憤慨もし口惜しがりもしたが、しかし何とも仕方がないので、屈辱を忍んで再びお高を賴みに出かけた。けれ共不思議な事にはお高はもう家には居なかつた。その行方は誰一人知るものがなかつた。それもその筈お高は神樣の化身だもの——いつかかう言ふ噂さへ誰言ふとなく又どこからともなく傳はつた。（中略）

音頭取りのお高の傳說は藝術の貴さを象徵して居る點に於て、我國にはまことに類の少ない美しい傳說である。何某の名工の彫つた猫がどうしたとか、何某と言ふ畫工の描いた虎が畫面から脫け出したとか言つた樣な傳說はいくらもあるが、さういふたぐひのものよりは此の傳說の方が遙に私達には貴くも亦意味深くも感じられるのである。（大坂朝日新聞相馬御風氏戀雪雜記の抄）

私は此の記事を讀んで大變にうれしう思つた。私の此處に書かうとして居る理窟つぽい意見よりもどれだけ藝術的でありよくわかるかしれないと思つた。お高が神であつたか佛であつたかは別問題として、少くとも藝術なるものが如何に實際の仕事に間接な——或は直接かも知れない——影響を與へるものであるかは、此のお高の傳說がよく證明をして居るのである。右は甲州地方に傳はる傳說が相馬氏の文豪の筆にのぼつたまでゝあり、傳說は何處までも傳說ではあるが、少くとも此の傳說の中より暗示さるゝ實際的の問題は社會にいくらもある事に注意せねばならない。

我々は時々鐵道線路や電車線略に工夫がツルバシを一齊に上げたまゝ、一人の音頭取りが歌ふ音頭に合せてはやしながら打ち下すのを見る事がある。又河川の橋杭を打ち込む時も何か面白さうな歌を歌ふ。夫れがすむと囃子の聲を合せて杭を打ち込むのである。之は一つの音樂であり、此の音樂がなければあの仕事は容易にはかどらないのである。我々が見て居るとあの樣な氣の長い事をやつてゐれば何程も仕事は出來な

からうとおもはれるのであるが、實際は返つて反對である。あの氣の長い歌と囃子がなければ仕事が出來ないのである。乾燥無味なあの工事も音樂に依てなされるのだ。地球上幾萬哩の鐵道も音樂の力に依つて出來上つたものだと考へる時、吾人が日常音樂によつて得る生活々動の多大な事を思はねばならない。見よ、戰爭に勇壯なる軍樂隊なかりせば、如何にして志氣を鼓舞する事が出來ようぞ、國家は音樂あるが爲に幾萬の精兵も戰場におくり出す事が出來るのである。瀬戸口氏の軍艦行進曲が波を渡つて靜かに流るゝ時、我帝國軍人の腕には血が湧きかへるのである。胸の血潮は高鳴るのである。硫石のバルチック艦隊も一朝にして海の藻屑とする事が出來るのである。「A, MARSEILLAISE. の曲が如何に佛國の戰士を狂氣の如くたけりたゝしめたかは戰史をひもどいて見よ。他の事は別として、私自身、一週間もピアノの音を聞かないと物淋しくてならないのである。私にはピアノは生命賭しての愛妻なのである。音樂なき世界には住ふ事が出來ないのは私のみではない。文化の進んだ人間程生活に音樂を必要とするのである。ハイドンのシンフオニーがケットルドラムに起り出す時私の五體は引きしまるのである。シューベルトのリード、メンデルスゾンのオラトリヲ、シヨパンのノクチユルヌ、私は、私の心は斯く數へ上げるでさへすでに緊張するのである。私の耳底にはベートーフエンの第九シンフオニーが響いて居るのである。

あまりに氣焰が上りすぎたから、又もとに戻る、吾人の生活々動はもとより、工場に働ける幾百萬の女工や印刷職工、彼等の無味乾燥なる仕事が、音樂に依て如何にエフイシエンシーを高めつゝあるかは容易に想像する事が出來るのである。

宇宙は一大樂器である。此の最大無限の樂器からはいつも美しく壯重なるリダム、メロデイー、ハーモニーが流れて居るのである。ダンテ、ゲーテ、ハイネ、ウーランドなどは此の宏大無邊の宇宙大音樂に合致したものである。

宇治の茶摘女の歌ふ茶摘歌はもとより、ひなびた田舍の小女が口づさむ田植歌、それ等は皆彼等相當の愛をひめたる心の叫びである。孟蘭盆の夜鎭守の森に集つて繼に

狂ふ男女の踊りも、シャンデリアの下に夜を忘れて狂ふ舞蹈の男女も、何れか異ならざりけん、共に戀に狂ひ愛を叫ぶ歌でなくて何であらう。前者が自然の舞蹈場たる鎭守の社の廣い庭で、月光をあびながら清い甘い戀を歌ひつゝ、森の木蔭にかくれては、相思ふ心と心とを結び會ふのに反し、後者が金樓玉臺天をつく大舞蹈場の中で、綺羅を裝ふ男女の群が、綠酒の香氣に醉ひながら、强きシャンデリアの光をあびてピアノの音にたけり狂ふのと何の選ぶ所ぞ。吾人々類の活動は、ソレが金錢であると道德であると學問藝術であるとの論なく、總て男女相互の愛の活動に立脚しないものはない。高臺に歌ふまろうどよ、汝等の端居に歌ふセレナードは、ひなびた田舍の小女も歌こそ異なれ、神のさづけし愛の歌を歌ひつゝ夏の夜の短きを森の木かげにかこつのである。「音樂は愛の聲」なのである。

第二　音樂は愛の聲

詩神ダンテは歌ひぬ。

「嗟。人間のいたましきわづらひよ、
辯證の、甲斐もなく誤れる哉。
なが翼は擊てども降りゆくのみ。」

あるものは法律を求め、
あるものは醫術に向ひ、
はた又僧道を追ふ。
あるは暴力、
詭辯によって領土を索め、
掠奪に、また國事に走る。
ひとりは肉の快樂に疲れはつれば、
他は安逸に耽る。

さるに、

我これ等の總てより離脱し、

ペアトリチエと共にかく榮ある天の淨樂に招かる。「天堂篇第十一の歌」

詩聖ブラウニングは「廢墟の戀」の中で「戀は最高のものである。」と歌つた。誠に戀は至上であり最高のものである。ひなびた田舍の小娘の茶摘や田植に歌ふ俗謠はもとより、五線紙の上に現はされた泰西の名曲はさらなり、古往今來詩人の口ずさみし幾多の名詩に至るまで、それが愛の發露であり、戀のソングでなくて何であらうか。人間の世の中に愛をぬきにした文藝が成立するものであらうか。

ブラウニングはかく歌ふ。

My own see where they ears conduct!

At first, it was something our two souls

Should mix as mists do each is sucked

In each now, on, the now stream rolls,

Whatever rocks obstruct, ("By the Fireside")

兼行法師はかく言ふ。

「よろづにうみじくとも、色好まざらむ男は、いとさうざうしく、玉の盃そこなき心知らずべき。」

(徒然草)

再びブラウニングに聞け。

But you spared me this, like the heart you are,

And filled my empty heart at a word.

If two lives join, there is aft a scar,

They are one and one, with a shadowy rhird;

One near one is too far,

A moment after, and hands unseen
Were hanging the night around us fast;
But we knew that a bar was broken between
Life and life: we were mixed at last
In spite of the mortal screen. ("By the Fireside")

グーテのファウストや、ダンテの神曲から愛をぬきにして果して何物が殘るであらうか。總てのものより離脱し、ベアトリチエと共に榮ある天の淨樂に招かれたダンテは「神曲」を人の世に殘した。まことに戀は永久の生命であり、久遠の都城である。至上のものであり最高のものなのである。

"Love is best" 何と力强くも美しい言葉ではないか。伊太利の抒情詩人グイニッェルリも「愛と美しき心とは一にして不二。」と歌つた。愛は眞理であり眞理は愛である。文學も藝術も教育も、否とよ總ての哲學も、更に廣く言ふならば吾人々類の生活活動は一として愛に立脚しないものは斷じてないと言つてよい。天に聳ゆる大ドームを頂いた大理石造の宮殿の生活も、それが貧者の一燈と何等の變りはない筈である。金錢もあらず名譽もあらず榮達もあらず、吾人々類の生活々動は戀をぬきにして何物もないのである。哲學は此處に生れ藝術は此處にはぐくまれ文學や教育は此處に生ひ立つてゆく。ラブ・イズ・ベスト、何と力强くも美しい言葉ではないか。

由來藝術は「愛」に出發する。愛は藝術の生命であり藝術そのものである。此處に宗教と一致する。「愛」は藝術そのものであると同時に宗教そのものである。佛心是れ多情、藝術は宗教そのものである。

チャールス・グーノーのセレナーデはすでに早くから我國に傳へられて居る佛國の古調、牧歌氣分の小夜樂である。それに妹尾文學士のつけた「夜の調べ。」と言ふ歌は諸君のよく御承知のものである。

「あはれ床しき歌の調べ、夕邊はるかに胸にきけば……

「夜半にあでなる君が寢顏、見れば嬉しやうつゝか夢か……」

この樣な歌を學校で――無論女學校程度の――教へたらそれこそ現在の教育者は――否とよ督學官の如き俗吏は殊更に――目を丸くしてしまふのである。一寸ラブめいたものででもあれば振い上つて居るのである。毛蟲にでもさゝれた樣な顏をするのである。

私は可笑しくてならない事がある。ラブのラの字も言ひ得ない女學校で盛に小倉百人一首をやらせて平氣で居るのである。よく考へて見るとよい。古往今來、多くの名曲は殆んど其の總てが「愛」に出發して居るのである。小倉百人一首の殆んど總てが戀歌である事は申すに及ばず、萬葉古今の古くより、更に古くは古事記に傳へられた歌謠が多くラブ・ソングではないか。「愛」を根底としないソングが何處にも人間味のないものであり、熱き血潮が通つて居らないのである。ブラウニングの詩に、

蜜蜂のふくろにみてるひとゝせの香も花も、
寶玉の底に光れる鑛山の富も不思議も、
阿古屋貝うつし藏せるわだつみの陰も光も、
香、花、陰、光、富、不思議、及ぶべしやは、
玉よりも輝く眞、
珠よりも澄みたる信義、

天地にこよなき眞、澄みわたる一の信義こそ、
をとめごの清き口づけ。「上田博士譯」

まことに愛は至上であり最高である。オヽ幸多かる人間の種よ、若し天國が支配されると同じ愛が、爾等の心を支配したならば。

日本國中幾萬の教育者よ、お前等は百科辭書の教育家である。お前等は百科辭書の子供を製造して居るのである。よせ集めて糊と剪刀で作つた百科辭書の教育は私の一番きらいなものゝ一つである。おゝ日本國中の教育者よ、お前達の頭は糊と剪刀で作

つた、新聞の切り張り帖である。

えらい惡口を申して相すまない。下手の長談議は止して更に本問題をつゞけて話す事としやう。外國の名曲――それが器樂曲であると聲樂曲であるとの論なく――殆んど愛を歌つたものである。ラブソングなのである。戀をも知らない――否とよ人間の至高至上の戀を知らない――教育者は眞に腰ぬけである。島田清次郎氏の「地上」に主人公の平一郎が教育者に對する戀の罵詈をやつて居る。眞に面白い一節だと思つた。私は今此處に戀愛論を述べやうとする者ではないけれども、熱も血もなき現今の教育界には之位の説明では頗る物足らないから、今少し言はせてほしい。

松蟲鈴蟲が千草にすだく秋のあはれより、暑くるしい蟬のなき聲、雄雞の東天紅をつげるコケコーに至るまで、果して如何なる目的で叫び鳴くのであらうか。雄が雌を呼び、雌が聲になびき集るのでなくて何であらう。人間の音樂も要するに其の根本に於て男女の愛を認めぬわけにはまゐらぬのである。ボーカルの肉聲でも男女の兩聲が必要なのである。「音樂は愛の聲」なのである。

聾啞の事實が吾々に示す樣に聲音は聽官によつて發達して來たものである事は疑ふ事は出來ぬ。啞生が言語に困難な事實は生れつき聽官の異狀の者が多い。而して下等動物例へば昆蟲の如きは、最初の音響は生欲に起原を發して居る。その音響は最初雄のみの發聲であつて、しかも之等が或る成熟期に達して初めて起る事實を考へて見るがいい。彼のキーキーと鋭き音は種々の方法で發せられるのであるが、大抵は翼、腿、又は脚を交互に摩擦するが爲に、鋸齒狀又は櫛形の邊緣が觸れて音を生ずるのである。蟬の或る種類は其の音聲一里の距離にきこへ、ギリシヤ人又は支那人の如きは其の聲を聞かんが爲に是を籠の中に養ふ。他の昆蟲は雌を呼ぶの目的で以て腹部を共鳴體とし、其の呼吸孔より空氣を壓出して音聲に近い音を發する事がある。かゝる昆蟲は其の身體の半ば以上は樂器であると言ひ得る。是等の樂器の調子は蜂の場合の樣に感情に激せられる時は變化する。魚類の或る者の如きは數尋の遠方まで聞える音聲を

發する事があると言ふ。彼の雄蛙の春期に閣々の鳴聲を出すのは人のよく知る所である、大抵如斯動物の鳴聲は普通戀愛の叫聲であり、愛の聲であると言ひ得る。鳥のよく歌ふものは例へば鶯の樣に美しい羽毛がない。つまり美毛にて雌を誘引するかはりに音聲で誘引するのである。鳥の鳴き聲は繁殖期ばかりではないが、此の時期に於ては殊に聲が變るのである。或る動物の喉頭は色情の起る時擴大し。他の或る動物の如きは繁殖期の外は何等の音をも發しないとの事である。動物界に於ける音聲のかくも愛と密接なる關係がある事を見て人間界ひとり然らずと言ふ何等の根據があらうか。近時の研究によれば、雌雄の兩性の區別が音聲の上に於て如何に密接なる區別あるかを證するに餘りあると言ひ得られる。例へば去勢して睾丸を摘出せる男子、卵巣を切り取りたる女子などの音聲の變化につきて見よ。尙又發情期と老年期との聲の變化。之等を見ても十分なる確證となるのである。於て平時の如く音聲が美でないのを見ても生殖器と聲音とは大なる關係あるものと見なすに疑ふ事は出來ない。ワイスマン氏（Weismann）の如きは音樂の感覺は雌雄生活とは何等の關係なしと言つて居るが、私は戀愛と音樂との關係を密接なるものと考へるものである。（G. Stanley Hall, Adolescence.）

音聲が戀愛と密接な關係のある事は右に述べただけでも十分に證明する事が出來る。戀愛は生殖より出て感情的なもの高貴なものとなつた。肉より出でゝ精神的なものとなつた。音聲も左樣である。戀愛や音樂はそれが直ちに肉欲や生殖そのものとは全然ちがふけれども、其の起原根底は之を生欲に發すると見る事は最も當を得たものである。ダーウイン氏の雌雄淘汰はまことに理由ある事であると今更ながらに感ぜられるのである。動物の內でも最も自由に音聲を使ふ事の出來るのは人間である。而して人間に立派な音樂があり立派な戀愛のあるのは人間の高等である證據である。音樂と戀愛とは兄弟と言ふよりも尙更密接である。同じ親より出た兄弟である。泥より出ても蓮の花は美しい。音樂と戀愛は泥より出た蓮の花である。

私は女學校や中等學校でラブソングを教へなければいけないと思ふ。堂々と教へるべきであると思ふ。小學校に於ても彼等が理解する程度に於て教へるべきものである。近時盛に生欲教育が論ぜられるが、生欲教育だなどゝ直接露骨な生殖器の説明よりも先に、まづ愛の眞理、至上の善なる戀を歌はせる必要があらう。でもこの樣な事を言へば百科辭書主義の教育者は目を丸くして怒るかも知れない。おゝ可愛相な百科辭書編纂者よ。

宗教教育は一の藝術教育である。之を逆に藝術教育は一の宗教々育だとも言ひ得られる。宗教的精神、藝術的インテレストのない教育は機械である。まことに現在の教育は佛作つて靈入れずの教育である。生徒の戀愛問題など起さうものなら退校か放校處分である。二人をひきさく位の事はまだしも聲を大にして攻撃するのである。ダンテはかく歌ふ。

姫はいふ、かなしみにありて樂しかりし日を思ふばかり痛ましきはなし。君が師も之を知り給ふ。

されど、君もしわれらが愛のそもそものはじめの起を知らむとさほどまで思はゝなきつゝかたる人の如くなすべし。

ある日樂みの爲に、ランチルロトの物語をよみ愛のいかに彼を苦しめたるをよむ。あたりの人なし、何の疑もなし。

此の書を讀む時、しばしば二人の眼は合ひぬ、顔の色もかはりぬ、而もたゞのひとつ、ふたりはうちくづる。

即ちうつくしきゑがほの、かゝる戀人にくちづけせらる時われより必らず放るまじきかの君は。ふるへふるへて我口をすひたまひき、此の物語こそふたりがなかうとのガレオットなりき。この日またよまずと。

ひとりの靈がかく語る間、他の靈はよゝと泣き沈むる。われらも絶え入るばかりにて、路の屍體の仆るゝ如く、うちたふれたり。(ダンテの神曲地獄界第五の歌フラン

チエスカとパウロ――上田博士譯）

瑞々しいベアトリチエに對する、ロマンチックの詩聖ダンテの愛は、遂に不朽の寶玉「神曲」となつて傳へられた。フロレンスの町を追放せられたムーゼは愛人に捧ぐる奉仕の爲に、又は全人類を救はむ爲に「神曲」を宣託したのである。我等は神曲によつて內面的生命の扉を開くべき鍵を見出さなければならない。宗教藝術の極致たる眞純なる戀愛の法悅なる境地は詩神ダンテの聖境にある。それが又教育の極致でなくて何であるか。

愛は至高至上のものである。人間が他の動物と區別せらるゝ所は愛にある。愛に根底を有して居らぬ夫婦は不道德者である。然しながら思想も自覺もなき一般の人間は他人の戀愛行爲を見て妨害しやうとする。殊に自覺なきわけのわからぬ日本人と言ふ動物の內に之が頗る多い。中學生や女學生が自分の胸中の煩悶をうつたへる樣な事の出來る教育者が一人なりとあるか。社會の人々は直ちに妨害するのである。何れが人道か否か。戀愛は一個の堂々たる音樂である。美しい人生のメロディーではないかマーチではないか。人として此の世に生れて出た上からは戀愛のマーチにて進まぬ樣な人間は人間として價値がないのである。ハイドンのそなたの馨く所、ハレルヤコーラスの流れる所、其所に美しい愛のシラベがあるではないか。

教育は愛の事業である。教育者は「愛の高塔に立ちて」、此の大事業を完うしなければならない。徒に熱と血と脈とを消した死人の樣な教育をするのではない。自動主義の教育もよからう。自由教育もよい。創造教育も文藝教育も一切衝動皆滿足教育もよい。どれも皆よい事ではあるが、愛を根底としない樣な自動教育も自由教育も創造教育も、何になるか。

あまりに學校の教室のせまい中からのみながめて居ると人間が小さくなる。今少し廣い天地に井戸の中から出て來て見よ。社會はも少し進步もして居り自覺もある。現在の社會はすでに考へるだけは考へられた。今や實行すべき時である。愛なき家庭は

破壞せよ。愛なき夫婦は別れよ。愛なき友人は棄てよ。愛を根底としない樣な教育は片つぱしから打ち破つてしまへ。そして愛と熱と血潮の高鳴る新人よ。一日も早く「愛の高塔に立て。」

何だか戀愛講座の樣になつてしまつた。此所まで書いて書齋の障子をあけると、東山からはぬつと高く黑谷の塔が頭をもたげて居る。靜な秋の夜はせまい庭からも蟲の聲がきこえる。蟲を捕うか聲捕らうか、嗚呼美しくも氣持よき自然の音樂よ。秋の雰圍氣よ。あはれにも淋しい蟲の聲々は雌よぶ戀の歌でなくて何であらう。四山に香る春の花も、それが植物の愛でなくて何であらう。花は植物の生殖器なりなどゝ露骨な事は止して、その美その香は花の愛の發露なのである。

あなぼがちかに麗しく、
晴れわたりたる自然かな、
日は輝きて野ぞ笑ふ、
枝々に花ほころびて、
森毎に鳥うたふ。
快樂、歡び、胸毎に、
泉の如く湧き上る、
おゝ日おゝ地、幸、快樂。
おゝ戀よ戀、おゝ戀よ、
見渡す峯に横臥せる、
あしたの雲の如くにも、
金色なして美しき。
ほゝゑむ野邊よ春霞、
なれが惠みのみつるかな。
おゝ我小女子よ、

君を愛する程、如何に、
あなやさしかる君の眼よ、
君も我をば愛すなり。
雲雀は愛づる歌や空、
朝花はまた天の香を、
われは汝をし
わが胸の熱き血をもて
愛づるなり。
あゝ青春と喜びと
また力とを汝こそは。
嗚呼それこそはそれらをば、
わが新しき歌の上に、

舞踏の上に與ふなれ、
あゝとことはに幸あれよ、
いましわれをば愛でよかし。（グーテ「五月の歌」正富汪洋氏譯、「ゲーテとシルレル。」）

第三　愛は至高至上

愛なき家庭は破壞せよ。愛なき夫婦は離別せよ。愛なき友人をすてよ。愛なきものは總てをすてゝしまへ。愛なき教育は片つぱしから打ち破つてしまへ。血潮みなぎる若き人々よ。此の見ぐるしい社會へ今一度愛を甦らせよ。「自然に歸れ」とルソーは叫んだ。「戀は最も高貴なるものだ。」とブラウニングは歌つた。若き人々よ自然に歸れ、そして至高至上なる戀を語れ。戀のエルレブニスなき者を葬り去れ。

古い落ちかゝつた樣な學校の書架から、教授日案や教授細目を取り出せ、そして

それ等を燒きすてゝしまへ。人世五十年の僅かの貴い時間を、教員室の隅の方に息はで、廣い天地の美しい太陽の光をあびよ。天下のインサイクロペデア式の教育者よ。お前達の頭は昔にカビが生えて居るのだ。太陽の有難い光を浴びて少しは甦れ。春の野には美しい花がさいて居るのだ。天使の聲はせまい教室の中では聞えない。春の女神の歌ふ聲をきけ。愛の天地はお前等の生活して居る教育界と言ふ樣なせまい帝國ではないのだ。お前等の帝國には文部大臣だとか督學官だとか言ふ暴君(タイラント)が居て、お前達はぢめ人間の貴い子供の生き血を吸つて居るのだ。お前達は毎日之等のタイラントに生き血を吸はれて骨と皮とになつて教壇に靑い顏をして立つて居るのだ。うまいものも食はせてもらへず、花のうたげに遊ぶ事も禁ぜられ、今に腦貧血をおこして教壇に斃れる時が來るのだ。毎日チョークの白い粉を吸ひつゝ生きて居る教育者よ、お前達の肺にはバクテリアがウヂョウヂョして居るのだ。教育帝國の憲法は言論の自由ならぬ帝國だ。女を顧みたる者は死刑に處せらるゝと言ふおそろしい國はお前等の國だけだ。ラブ・イズ・ベストでなくて死刑だ。何とおそろしい國だ。

お前達可愛相なる人間よ。先づ甦れ。そして古い書架からインサイクロペデアを燒け。大宇宙の愛の世界には太陽の麗光にてらされてマホガニーの書架にインヂャンペーパに印刷された美しい愛の書物が一冊――僅に一冊だけ――のつて居る。ブリタニカもヂャポニカもそんなものは燒きすてゝしまへ。殊にカビだらけになつた何とか博士の廣文庫など言ふシミの食つた食ひ餘しをよせ集めた殘飯をすてゝしまへ。愛の世界にはアダムとイブが味つた木の實が澤山に熟して居るのだ。盲(めしひ)の作つた群書類從をふりまはして總てに優る帝國とうぬぼれるな。伊藤仁齋や中江藤樹の樣な教育者がどんなに力こぶを入れたつて神の作つた天使を教育する事は不可能なのだ。

お前達の世界では「戀に落ちる」と言ふ言葉が辭書にのつてゐる。私等の愛の世界では「戀に上る」のだ。愛は至高至上であるのだ。戀する男女を障害したり妨害したりする樣な獸の世界を我々は教育界と呼ぶのだ。お前達の世界は獸の世界だ。皆がよ

るとたかると嚙合つては吠えて居る。何と殺風景な世界よ。獸の世界には交尾はあらうが愛や戀があるか。若き教育界の者どもよ。甦る時が來たのだ。眼覺めよ。赤き百萬の太陽は東天に輝いて居る。曉鐘は打たれた。廣い森のかげには若き男女が公然と愛を語つて居る。若き者どもよ。密會など言ふ下劣な不自然な事はよせ。公然と戀を語れ。愛を話せ。そして樂しい美しい面白い神のパラダイスに遊べ。早く教育界から首になれ。正義と眞理と愛の旗をおし立てゝ進め。そこには天上のオーゲストラが高くマーチをかなでて居るのだ。

我々の世界にはベートーフエンやハイドンやショパンなどが歌つて居る。ゴッホやゴーギャンやマネーやマチスやラフアエルなどが一生懸命にカンバスに畫いて居る、ミケルアンゼロやロダンが汗水を流して刻んで居る。ダンテやゲーテやハイネやブラウニングが盛に詠んで居る。如斯にして教育は自然に出來て居るのだ。愛の世界の歴史にはナポレオンもビスマークも豐臣秀吉も織田信長も記載してないのだ。マーブルで造つたターヂマハールの樣な高塔が至る所にあるのだ。その高塔へは何人も自由にのぼる事が出來るのだ。早く早く愛の高塔に立つて天下を見下せ。森羅萬象、お前達の世界では見る事の出來ぬものばかりだ。早く愛の高塔に立てよ。

百科辭書の教育者よ。お前達の頭は新聞記者の頭の樣だ。糊と剪刀でよせ集めたスクラップ・ブックの先生よ、教案とか週錄とか言ふものを書いてどうするのだ。貴い人間の子供をお前達が教へて自分と同じ人間にしやうとするのか？　右向け右をさせてどこへつれ出して行くのだ。督學官と言ふタイラントが廻つて來ると何故に頭をさげるのだ。人間は平等であり自由であるのだ。頭をさげるものは宇宙に唯一つしかない。何だか知つて居るか？教へやう。それは眞理だ。

何々大學教授だの何々博士だの何々講師だのが戀するとお前達の世界では何故にそんなに騒ぐのだ。うらやましいからだらう。愛の世界はそんな事は自由だ。うらやましければ早く教育世界に死んで愛の世界に甦れ。何々博士の娘が戀に死んだのはお前

達が殺したのだ。道徳とか慣習とか言ふ獣の世界がおきてを以て殺したのだ。お前達の世界は何と悲惨な世界であるよ。何故に戀が惡いのか、教へてくれ、獣どもよ、私は不思議でならないのだ。私等の世界では戀は何よりも貴いのだ。金よりも名譽よりも、そしてそれが動かすべからざる大道徳なのだ。巨匠ブラウニングはそれに「至上の寶」と名づけた。其の至高至上の寶が何故にお前達には不道徳に見えるのだ。カルーソーのボーカルに聞け、バデレウスキーのピアノに聞け、美しくもやさしき愛が流れて居るのを見よ。

お前達は戀愛と言ふと直ちに肉欲を考へるのだ。獣の世界には肉欲しかないのだから止むを得ないが、今少しラブを崇高化してはどうだ。高貴化してはどうだ。お前達の世界には立派な音樂もないのだ。音樂は愛の聲なのだから、愛のない世界に音樂があるものか？　萬卷の書物何にかならん。愛をヌキにした世界、戀をヌキにした人生は獣の住ふ世界である。戀愛をヌキにした教育、そんな冷たい世界に生きて居る者共よ、お前達を稱して冷血動物と言ふのだ。冷血動物に此の貴い音樂や藝術が理解されてたまるものか。お前達には猫に小判であらう。

おゝ百科辭書の教育者よ。まだ眼が覺めないのか、困つたものはお前達下界の動物だ。骨と皮とで作られた教育者と呼ぶものだ。早く自然と自由に甦れ、そして愛の高塔に立てよ。お前達の生命は僅に五十年しかないのだ。その半分はねて暮すのだ。おゝ早く眼覺めよ。教育者よ。お前達のやつて居る教育と言ふ事は我々愛の世界の住人から見ると頗る非教育な事ばかりだ。お前達の教育は暗記が生命だ。よくおぼえると言ふ事が暗記なのだ。詰めて詰めて詰め込むのだ。倉庫に詰め込むのと同じだ。詰め込んで出す方法を知らないのだ。澤山の金を貯金しても之を使用する方法を知らない守錢奴なのだ。愛の天地には金貨も銀貨も紙幣もないのだ。愛が最高のものなのだ。

百科辭書の教育者よ。お前達の教鞭は折つてしまへ、黑板を打ち破つてしまへ。教壇をつぶしてしまへ。四間に五間の校舍なんかを勞働者の住所として與へてしまへ。

愛の天地にある學校の教室はお前達の教室の樣に四間と五間のせまいものではないのだ。自然には廣い教室があるのだ。萬金を投じた理科實驗室なんかつぶしてしまへ。自然には廣大無邊の大理科教室が提供されてあるのだ。もつと大きな世界を考へよ。そして人間を今少しく大きくせよ。お前達の手の上で弄ぶ鑛物の標本はどうするつもりなのだ。自然の教室にはお前達の動かす事の出來ない程に大きな標本がゴロゴロして居るのだ。水成岩や火成岩のかけをすてよ。ほんとうの水成岩や火成岩は澤山に用意してあるのだから。

百科辭書の教育者よ。早く目さめよ。愛の高塔に立て、宏大なる自然に立派な教室があるのだ。おゝ目覺めよ早く、早くめざめよ。

蹴飛せ、敲きつぶしてしまへ、一切の百科辭書的教育を。そんなものが何になるんだ。鑛語教育や殺人教育を蹴とばせ。愛の高塔に立ちて生きとし生ける人間の子供を教育せよ。"Love is all"「愛は教育の總てゞある。」

第四　生ける道德教育

教育の殆んど大部分は目と耳とに依てなさるゝものであると言つても蓋し過言ではあるまい。實に目と耳とは教育上最も重大なる身體の門戸であり窓である。殊に藝術的感興を感受し、人世の至高至上なる愛の境地に到らむとする者は目と耳とを除外しては不可能なのである。目より入る藝術には詩歌、繪畫、刻などより建築、舞技に至るまで隨分に澤山ある樣であり、數へ上げるならば實に限りもないのである。然るに耳より入るものは唯音樂のみである。如斯、視覺的藝術が多岐多樣なのに比して聽覺的藝術は音樂あるのみである。音樂が如何に教育上重大なる役目を持つて居るかは之でもよくわかる事だと思はれる。

抑我々の感覺には五つの大きなものがある。しかし吾々人類の高等なる感覺は頗る微妙なものであつて、之等の感覺に依て種々高尚なる情緒を引き起すのである。高等

なる動物程より微妙であると言ひ得る。動物によらず人間だけで考へて見ても微妙なる感覺を有して居る者程高等な人間であらねばならぬ。人間として立派な人は澤山に金を貯金したり、自動車で走つたり、洋服を着て革の鞄をさげ髯でも生して居る樣な事や、あちらにもこちらにも蓄妾して居る樣な人を言ふのではない。又引きや蔓によつて大臣になつたり、官僚になつたりする人でもない。人間として高貴な人は天才である。而して天才は最も感覺の微妙な人間である。

例へば此處に單音しか理解しない人と音樂をテンデ理解しない人とがあると假定するならば、單音だけでもわかる人はより高等な人間である。次に重音のハーモニーの微妙が理解できる人、感ずる事の出來る人はより高等である。此處に食物で例へるならば、下等な人間は成べく多く食へばよい。味位は少々はさづくとも承知だ、兎に角澤山にほしいと言ふ事になる。處が高等なる味覺の所有者は左樣でない。可成味の良いものを味ひ度い。多くを要しない。少しでも良いから種々の變つた良い味を味つて見度いと言ふ事になる。つまり感覺が微妙になるのだ。之を犬に例へて見よ。如何なる場所に置いても食ふものは食ふが、人間は馬糞の上に刺身の肉を置いてくれても食はうとはしない。犬は平氣で食つてしまふのである。

感覺は刺戟によつて起る。只しかしながら刺戟が同じ場合に感覺の度の高い人は低い人よりも人間として高尚だと云ひ得る。鈍感な人はあまり物事に感じないのであるが、それだけ低級な人間なのである。音樂に於ても其の通りで單音程度の人と重音程度の人との樣である。

藝術は實に吾人の精神から生れ出たものである。感情の聲は音樂であり、之を具體的に表現したものは繪畫彫刻などより詩歌舞蹈などである。音樂は如何なる野蠻未開の人にもあつたのであり、自分の精神を歌ふのである。此處に音樂は實に人類に共通性をもつて居り、又頗る民本的の色彩をもつたものである。子供も歌へば大人も歌ひ、貴族も歌へば貧乏も歌ふ。文明人も歌へば野蠻人も歌ふのであるから、之程民本

的の色彩に富んだ藝術はないと言ふ事が出來る。

高樓の生活は吾人の望む處ながら金のない貧乏には遂に得て望む事は不可能である。立派な藝術は日々觀賞して見たいが之も朝に耕し月を頂いて歸る勞働者には不可能である。唯音樂だけは如何なる仕事に從つて居ても、吾々貧民の疲勞を慰藉してくれるものであり、自由なる神の世界へ導いてくれるものである。樂しい思ひを淋しい思ひを悲しい思ひを歌ふのである。實に自然の大道德に吾々を導くものは藝術であり、その藝術の內で最も微妙なものは音樂である。音樂は自然の道德であり、人格の建築は音樂で以てしなければ出來ない點があるのである。

私は唱歌を以て生ける道德教育だと言つた。しかし誤らない樣にしてほしい。と言ふのは一般の教育者は道德教育とし言はゞ直ちに忠孝だとか正直だとか忍耐だとか信義だとか、其の樣な修身の格言の樣な歌を持ち出して教へるとか又は教訓したりしなければならないものゝ如くに考へて居る。それは大なる誤りである。唱歌は修身科の奴隸ではないし又歌詞が教訓的なものなどを撰ぶ事は以ての外である。唱歌の歌詞は修身の格言ではないし、唱歌は又修身科の奴隸でもない。私の所謂道德教育と言ふ意味は、音樂的の情緒を味ふ事それ自身が頗る德性の涵養に大なる價値を有すると言ふ意味である。私はいつも考へる事であるが小學校の教育を見ると、修身はもとより其他種々の教授に於て、教訓と言ふ事がつきものである。教訓する事も決して惡いとは申さんが、教訓しないでも或る方法を以て自然に彼等被教育者を教員の人格に靡かせる事が出來るならばそれが一番立派な教育者であらねばならない。修身の教授でも其の通りである。小學校の先生はいつも教訓するにきまつて居る。それも彼等の情緒を引き起させる樣に出來ればよいが、教訓はいつも「言ふて聞かせる」のであり、「叱る」のである。生徒こそ大迷惑な次第である、惡い事もしないのにお目玉をもらつて居るのである。修身の時間や格言の說明、講堂訓話などゝ言ふ時は叱られるに定まつて居る。之は大なる教育上の誤解である。私は教育上の德育と言はゞいつも子供が可愛相

でならない。之は全く自覺なき教育である。修身の時間に種々の說話を聞かせるのは良い事だ。しかしながら此の際に說話そのもので以て感心させればそれで良いのだ。然るに一般の修身教授を見ると說話は至つて下手である爲に生徒に感動させる事が出來ない。そして訓戒である。お目玉である。之が普通の修身教授なるものである。私は修身科に於ても訓戒なんかは不必要だと思ふ。何故かならば說話を十分に面白くして、說話中の人物を教授に活動せしめ、子供の感興を引く樣にするならば、正直なれとか孝行なれと言ふ樣な訓戒は返つて說話の感興を殺ぎ、切角立派に德性の涵養が出來たものを又其の熱を冷却させてしまふ事になると思ふ。子供はいつも家庭に歸つて「修身のお話は面白いが、時間の後の方で言ふて聞かされるのがいやだ、」と。眞にその通りである。說話そのものが無言の內に子供の心性を立派に涵養して居るのであるから、ことさらに正直なれ、お前達は孝行せなければいけないぞ。どんな風に孝行して居るのか言つて見よなどゝ變な處に力瘤を入れるのは子供の感興を殺ぐ事甚しく、以ての外な教育なのである。だから修身の時間は叱られる時間だとしてしまふのである。唱歌でも其の通りである。唱歌で德性を涵養すると言ふ事はその歌曲を歌ふと言ふ事それ自身が價値があるので、上手に歌ひ得て子供が感興を起し、その歌曲についての趣味を味ふならばそれで德性の涵養は出來たのである。

私は修身の教科書を見ていつも思ふ事であるが、正直なれ、孝行せよ、などゝ題目を讀んで實に不思議でならない者である。修身の教科書は總て正直なれ孝行せよにきまつて居るのであるが、そんなに德目で以て身動きもならない樣な事をやるから教育は少しも進歩しない事になる。修身の研究は此處には書かないけれ共、要之教育者は修身の時間とし言はゞ生徒を叱りつけたり教訓をしたりする。先生と言はゞ叱るものの教訓をする者と高がきまつて居るのである。唱歌でもその歌曲の題が孝行だとか忍耐だとか言ふ樣なものを選擇して叱りつけて見る。何たる不眞面目な教育であらうか。私はかゝる修身の德目の樣な唱歌の題や歌詞の內容は絕對に採用してはならない者だ

とおもふ。何故とならば唱歌で以て修身教授をするのではないからである。唱歌で以て德性を涵養すると言ふ事は、子供を叱りつけたり訓戒したりする事とはちがふからである。歌を歌つたり上手に味つたりする事それ自身が德性の涵養なのである。

兎角日本人は殊に教育者は道德づくめでいけない。尙犧牲的の義務的道德を强制する事が多い。之は實に我國の風習とは言へ困つたものである。佛教と儒教の混交した義務的の道德、「何故」と言ふ言葉の上に立つて直ちに破壞さるゝ樣な道德が多いのである。

由來教科と教科の價値目的を連絡づける事はよい事である。何故とならば總ての教科は教育の目的を達する爲の資料にすぎないからである。唯しかしながら諸教科との關係などゝ言へば、例へば歷史で補正成を教へたから補正成の歌を唱歌でも歌はせると言ふ樣な事を連絡だと考へて居る。かゝる形の上の連絡は教育上殆んど價値のないものであり自覺せざる教育說である。之と等しく唱歌は生ける道德教育であると私が述べると、直ちに修身の題目の樣な唱歌を教へる必要のある如くに、考へる者もあらう。之は大なる誤である。唱歌にて審美的の感情を涵養する事それ自身が道德教育なのである。審美と言ふ事それ自身道德と關係するものである。それが下手な修身教授よりも如何に高等なる精神のはたらきであり、生ける道德教育として價値があるか知れないと言ふのである。

初等教育に於ける耳の教育は主として道德的の精神を涵養する事に目的を置かなければならない。而して唱歌の實際の技能を熟達せしめ、巧妙に歌はせる事にのみ骨を折ると言ふ事のみであれば、殆んど教育の目的に添はない事となるのである。之を極論するならば、耳の教育や音樂の目的を達する爲には、一切子供に自ら歌はせる事を絕對に中止しても、或る點までは成就する事が出來る事になる。從來の唱歌科と言ふ耳の教育はあまりに子供の巧妙に歌ふと言ふ技術の方面に重きを置きすぎて居た。爲之、唯細密な技巧的方面にのみ努力して、重要な聽く事の教育――ツマリ耳の教育――

—を忘れて居た樣に思はれる。若し技巧的の事のみを以て目的とするならばそは專門家を養成する事であつて、少しも幼少年の爲の初等教育の目的と關係がない事になつてしまふ。

私は音樂の道德的涵養について、聽く事を大にやらなければならないと言つた。それには大に理由がある。子供でも大人でもすべてを通じて一般に技術よりも能力の方が一歩早く進んで居るものである。或る能力に依てそれが技術として現はれるのであるから、子供の能力は技術よりも一二歩進んで居ると見なければならない。卽ち子供が好むとか望むとかの唱歌はどれでも子供が歌へるかと言ふと左樣ではない。つまり子供は自分の技術として表現し得ない歌をも之を觀賞する能力は持つて居る。觀賞の能力は表現の技術よりもはるかに進歩して居るから、歌ひ得ない歌でも之を聽く事を要求する。此處に教育上重大な意味が含まれて居る事を知らなければならない。

卽ち此の意味に於て考察すれば唱歌による道德性の涵養は子供が學校内で歌ひ得るだけに止まらず。歌ひ得ないものは之を聽かせて以てその陶冶に資する事が出來得る事となる。自分が歌ひ得ざる程度の歌曲と雖も之を觀賞する能力は持ち合せて居るのであるから、音樂會なり教員自身の獨演なり、蓄音器なり自動ピアノなりに依つて大に彼等の技術以上のものを聽かせる必要がある。如斯にして能力をより以上に發達させる事はそれ自身が道德教育としての大仕事をはたす事となるのである。

音樂は他の藝術、例へば繪畫や彫刻等の造形美術に比較すると頗る直接的なものである。繪畫や彫刻の如き造形美術に於ては、藝術的な精神感情を直接觀賞者に傳へる事が出來ない。つまり繪畫とか彫刻とかに客觀的に表現されたものに依てのみ傳へ得らるゝものである。此處に所謂リツプスの感情移入に最も深い意見が存する。

然るに音樂はどうであらう。歌があるから歌ふのではなく曲があるから彈奏するのでもなく、歌はざるを得ぬのであり、彈奏せざるを得ぬから彈奏するのである。感極まつて歌ふのであるから。そこに如何なる人の作歌曲を歌つても、之を自分の作歌曲

として歌ふのである。そこでその歌曲を假令他人の作つたものであるとしても、自分の感情がその歌曲を通じて表現される事となる。――自分自身の作であればより以上深く表現されるのはもつともな事である。――つまり自分の感情をその歌曲を通じて發表し表現する事になる。此處に人格の陶冶と重大な關係がある。即ち唱歌はかゝる自己感情の表現が何物の仲介も借らずして、直接自分の音聲を以て、あだかも自分の思想を言語によつて表現する樣に、他の觀賞者に傳へ得られるのである。而してそれは言語よりも繪畫よりも彫刻よりも他の如何なるものよりも感情の表現としては適當であり實際的であり深い印象を與へ得られるのである。

私はいつも言ふ事であるが、自分の作歌作曲をしたものを自分で歌ふと言ふ事は最も深刻な表現である。それは眞に純粹な表現と言ひ得られやう。しかし作歌作曲などは總ての人々に望む事は出來ない。只作歌作曲の能力ある者に於てのみ望み得られる事である。だから一般の人は他人の作を借りて自分の感情を表現しなければならない。此處に大なる意味がある、他人の作歌曲を借りての表現は、眞に自分の感じとピッタリと合致して居るか否かと言ふ點を考へなければならない。即ち他人の作品を見てそれが眞に自分の感情に寸分違はずピッタリと合致して居れば、その作品を借りて自分の感情を表現する事は、それは自分の作歌作曲と少しも變りはない筈であり、最も深刻に純粹に出來得るのである。しかし寸分違はずにピッタリと合致した樣な歌曲はあまりに無いと言ふ事はたれしもが首肯する處であらう。それは其の通りである。自分が作曲作歌をしてさへピッタリと表現が出來た樣なものはなかなか出來ないから、まして他人の作品に於て自分の眞の心を求むるなどゝ言ふ事は不可能かも知れない。若し左樣なものがあれば不思議な事である。して見ると他人の作品を通じてこの發表は幾分は自分の感情で以ては考へられない樣な點も混入して表現する事になるのは止むを得ない。そこで教育上から言ふならば被教育者が好む歌曲を教授すると言ふ事が、被教育者が最も自己の感情を表現すべく適當なものとして選擇したものである

點より、教育的に大なる價値ありとしなければならない。尙又他人の作歌曲を通じて——借りて——の表現は、他人の作品を十分に歌ひこなして自分の藝術品として之を表現する必要が起つて來る。自分の藝術的の作品であるか否かゞ見わけが附かなくなる程に歌ひこなして自分のものとしてしまはなければならない。右の二つの問題は教育上大に考へなくてはならない重大なる研究問題であると思ふ。

東京高等師範の初等教育研究會編輯の雜誌「教育研究」大正十一年一月號に於て次の樣な事が書かれてあつたのを見た。「唯單に子供が好むとか喜ぶとか言ふ好奇心によつてのみ教育する事は出來ない」。（同校唱歌研究部發表の唱歌研究論文中）と。私は之を讀んで不思議でならなかつた。（右論文は本書の兒童作歌作曲問題の節で十分私の意見を書いて置いたが）第一好奇心と言ふ事が教育上惡いかよいかの問題や、如何なる科學と雖も藝術と雖も人間の好奇心に立脚しないものはないと言ふ事は別問題として此處には論じないが、子供の好むとか喜ぶとか言ふ歌曲は、ソレが子供として自分の感情の表現をなすべく他の歌曲よりも最も自分の感情に近いと感じたからでこそ好みもし喜びもするのである。だから他の歌曲よりもその歌曲を好みもし喜びもするのである。好んだり喜んだりする樣な歌曲はそれがその兒童の感情とピッタリと合致しないまでも、最もその感情に近いと言ふ事は事實であればこそ好むのであり、それを歌ふ事に於てよく感情の表現が出來るから喜ぶのである。何人か子供と違はぬ精神になり得やうぞ、而して只「好むとか喜ぶとかのみにて教育する事が出來ない」と言ふ樣な古いカビの生えた教育說が尙大日本帝國の帝都の最中なる、しかも高等師範の音樂の先生達から聞かされなければならないのであらうか。又かゝる不自然な教育をさるゝ生徒こそ眞に可愛想だと私は思ふのである。

子供が好むとか喜ぶとか言ふ事のみを目あてにして教育をして居ると、いつまでもそれ等の幼稚な教材にのみふみ止まつて少しも進步しないと考へるのは誤つて居る。子供は創造的の能力を有して居る。だから彼等は自分の好む教材によつて次へ次へと

進歩したものを好む樣になつて來る。之を大人の教育者が無理に引き延さう、吊り上げやうとする處に子供の心理を蹂躙した、非教育的非創造的な教育が出來て來るのである。

由來從來の教育は唱歌に限らず、教育の進歩又は兒童の教養には、兒童の好み喜ぶ教材以上のものを與へてゆく事にのみ努力されて居た。之が根本に於て誤つて居る。つまり從來の舊式教育者は子供の好み喜ぶ以上のもの、子供の心理以上のもの、現在の能力より幾分か程度の高いものを彼等に與へようと努力した。此處に於て教師は絶大な努力を拂ふ事となり、その割合にはテンと教育の進歩がなかつたのである。之は根本に於て誤つた教育法と言ひ得られる。何故とならば彼等子供の好むとか喜ぶとか言ふ能力乃至は思想は彼等の技術よりもはるかに進んで居るからと言ふ事が一つと。今一つは自己を創造してゆくのには自分のすでに食つた食物によつてのみ、その分量が次の創造の資本となるからである。教員が如何に努力をしても、自分の創造の資本となる以外の資料は不必要なのである。

要之、子供の好むとか喜ぶとかの唱歌教材はそれが彼等の人格の建築、自己表現、情想の陶冶、審美觀念の養成に、最も適當であると感じたからであり、しかも彼等の感情移入を明示せるものでなくて何であらうか。さすれば彼等の好むと言ふ事と喜ぶと言ふ事とは最も必要な重大なしかも深刻な意味が教育的にあると言ひ得るのであるから、教育者は常に彼等の好み喜ぶ歌曲をのみ指導してやるべきものである。初等教育はそれが唱歌のみならず總ての教科を通じて、教授するのでなくて指導するのである事を忘れてはならない。

若しかゝる指導を唱歌に應用して子供の自由選擇にまかせるとするならば、如何なるものより選擇せしめ得るかと言ふ疑問が起ろうと思ふ。之は本書別項に書いて置いたから參照してほしい。要するに新しき歌にうつる際には教師は先づ十か十五程の子供の好み喜び相な歌曲を歌つてやり彈奏して聞かせる。而して其の内から自由に選擇

させるのである。尙右の十か十五の歌曲に子供は共鳴しなかつた際は更に他の十か十五程を聞かせてやる。而してかゝる自由選擇の時間は一時間かゝつても二時間かゝつても、何時間を之に費してもさしつかへはないのである。之を要するに唱歌に於ける人格の建築と精神の陶冶に最も重大な事は子供の好み喜ぶ教材の選擇と言ふ事である。

次に表現の事に戻る。子供が自由に作曲作歌をしてそれを自由に歌ふ事は最もよい事であるが、一般には尙そこ迄進歩して居らないであらう。だから他人のしかも大人の作品を借りてそれを通じて表現するのであるが、其の際にはその歌曲は全く自己の作歌曲である程によくピッタリと全く合致して居らないまでも、殆んで一致して居る程に歌ひこなさなければいけない。そして自己の藝術として之を同化して表現するのである。而して其の表現は作者の表現でなくして自己の表現となつて居らなければならない。

私の體驗（エルレブニス）の事を一寸述べる。私は音樂の專門と言ふ樣な大きな看板をかけては居らないけれども、音樂のみを以て生活して居る者であるが、學校や個人の宅などで教授する場合にはいつも私の藝術をのみ教授し指導するのである。私は例へば或る第宅の娘のピアノを指導するとする。其の際にハイドンの曲を指導したと假定する。之は私がハイドンの曲を此の娘に受け賣りをしたのではない。私はハイドンの藝術を此の娘に傳へたのではない。私はハイドンの藝術を自分のものとして一度自分の精神に同化し而してその同化して自分の精神を其の曲を通じて表現したのである。だからハイドンの精神を表現したものでなくて、其の時はすでに自分の藝術として表現し指導したのである。私は音樂會で自分の作品でないものを歌つたり彈奏したりする。此の時に例へばブラームスの曲を歌つたと假定する。すると私はブラームスの藝術を聽衆に傳へた事となる。しかし左樣ではない。若し左樣であるならば、私はブラームスの藝術を聽衆に傳へるだけの傳導器具と異ならない。卽ち一個の機械である。その樣な機械が

音樂會場で大聲で歌つたつて何になる事だらう。それは死したる藝術である。かゝる音樂會ならば蓄音器でゞも事足るのである。しかし私が音樂會で歌つたと假定する。それはブラームスの藝術を私が機械器具となつて傳導したのではない。此處に重大な役目がある。自分はブラームスの作品を通じて自分の藝術的の精神感情的の思想を、自分として發表して居るのであるから、假令その作品はブラームスの原曲であつても、そこにはブラームスの何物も現れて居らない。自分が現れて居なければならない。

若し他人の作品を通じては到底自分の眞の精神とピッタリと合致したものがないと言ふ事であれば自分が作曲するより致し方がない事になる。すると眞の音樂家は作曲作歌を自分で獨力やる人でなければならない。宜なり昔から眞の天才的の音樂家は各々立派な作品を殘して居るのである。

日本の女流音樂家が時々各所で歌つたり彈いたりして音樂會のステージに立つ事がある。而して其の歌ふもの彈くものを見れば多くは他人の作品である。即ち彼等は要するに眞の音樂家ではない。彼等には自分の作品を持つて居らない。つまり小學校の生徒の樣に、自分の精神に同化した他人の作品を通じて自己の感情を表現するのである。しかしそれはその人の藝術であり、其の人の感情の表現であるにちがひない。假令他人の作品を通じての表現であつても、自分の最も歌ひこなした、自分の精神に同化した作品であり、それを通じての表現であるから。しかしそれは教育的に考へる場合であつて、專門的に考へるならば、その女流音樂家は眞の音樂家としての要素を缺いて居る。つまり自分の作品を持つて居らない。如何なる自分の思想感情と雖も、總て他人の作品によつてのみ表現すると言ふ事はあまり大きな音樂家と言ふ看板に對してゞも恥づかしい次第である。しかし日本の女流音樂家にはそれが多い。昔から一人の女のベートーフエンもハイドンもモツアルトもブラームスもシユーベルトもチヤイコフシキーもバデレウスキーもないのである。我國に於てもその通りである。我國

に一人のかゝる女の樂聖もなければ一人の女の山田耕作氏もないのである。

あまり話が大きくなり出したから之で此の話は打ち切る。只音樂は教育的に如斯とするならば、又かゝる重大なる責任ある教科とするならば、修身の如きチョンマゲ式の古い死せる道德律の羅列や、犧牲的の變な强制的道德や、「何故」の上に立ちて少しも理由のない佛敎と儒敎のこんがらがつた道德の敎育よりも、音樂が如何に崇高に壯重に雄大に、又纖細に詳密に深刻な生ける道德敎育であるか知れない。實に音樂は審美的の陶冶はもとより、人格的にも道德的にも、はた又敎育的に、どれだけ重大な價値を有するものであるか知れない。田舍の方へ行くと——否とよ大都市の最中でも——唱歌の如きは新しい子供の樣な年のゆかない。そして至つて敎育としての自覺も、音樂的の力もない女敎員にまかせて、少しも顧みる事がない。時には唱歌なんかは時々しかやらなかつたり、式の唱歌だけしか敎へなかつたりして居る樣な處が隨分に多い樣である。我國の敎育も尙前途が遠遠であると言ふべきである。

音樂はしかく生ける道德敎育である事に疑ひはない。して見ると一校の敎育の成績は其の音樂を見ればよくわかる。音樂をなどかりにして居る樣な學校で他の敎育の出來て居さうな筈はない。何故であるか、敎育敎授の事業は一の藝術的の仕事だからである。而して人間を價値づける藝術の高貴な事を知らない敎育者が多いからである。藝術を理解しない樣な敎育者が何人居たつて立派な敎育は出來ないのである。

敎育は愛の事業である。音樂は愛の聲である。愛の事業としての敎育に愛の聲である音樂がどれだけ意義ある、深刻な關係あるものなるかは今更私の言ふまでもない事であらう。何處の學窓からも美麗なリズム、メロディー、ハーモニーがいつも流れて居らなければならない。思ふて此處に至り、顧みて我國の現今敎育に及ぶ時、吾人は實に身に寒汗せざらむと欲して能はざるものあるを如何にかせむ。敎育者の責又大ならずとせむやではないか。

第二章　天使の聲

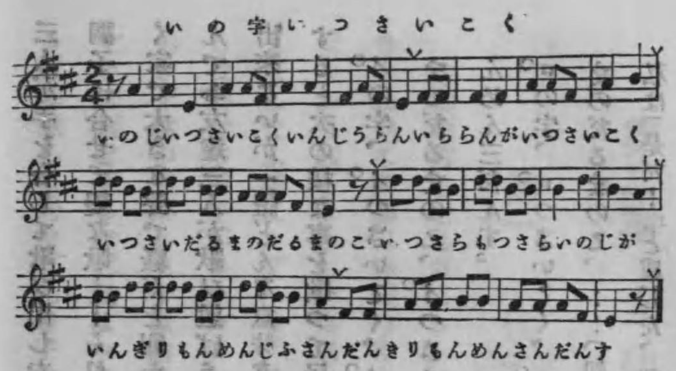
第一　子供の世界は神曲の園

寒雲素雪とでも言はうか、寒い冬の最中しかも夜十時頃の事である。私は國へ歸らうと思つて京都二條驛の待合へ入つた。二條驛と言はゞ京都でも田舍の乘客ばかりで常々から頗るさみしい停車場であるが上に、置く霜も白い寒天であるから身も心も凍えてしまふ樣におぼへる。私は二三人の待合客しかない三等のストーブに向つて、大きな時計の振子がカチカチと動いて居るのを見て居た。所が俄に急がしさうに子供らしき下駄の音がして十歳前後の女の子供が三人待合へ駈け込んだ。と思ふと待合のベンチに腰を下した。私は一たい何をするんか變でたまらぬので一生懸命にその方ばかりに注意して居た。此の子供等は此の驛前あたりの子供である。すると腰を下すなり三人が手を合して歌ひ出した。手が自由に上つたり下つたり横へ行つたりする、その調子に合せて變な歌――それは少しも理解の出來ない歌を――歌ひ出した。多分夜遅く家で大きな聲で騒ぐと親からやかましく言はれるものだから、三等の待合へ駈け込んでお友達三人が歌ひ遊ばうと思つて來たのらしい。私は其の歌が少しも私に理解が出來ないが一體どんな意味なんだらうと、そつと三人の近くまでよつて聞いて見た。すると次の樣な事を歌つて居る。

イの字、イつさいこく、イんじうらん、イらんが、イつさいこく、イつさいだるまのだるまのこ、イつさらもつさら、イのじが、イんぎりもんめん十三だんきりもんめん三だんす。

ロの字、ロつさいこく、ロんじうらん、ロらんが、ロつさいこく、ロつさいだるまのだるまのこ、……（如斯に頭音が次第にイロハ……と變つて行く）

私は「是だ！」と感じた、確に「是だ。」私は急に手帳を取り出して歌を書き取つた。



そして無暗に手帳の空白に五線を引いて右の歌のメロディーを取つた。俄の事であり音又も持ち合せて居ないが大體に於て歌曲共に誤りなく取れたつもりである。即ち上のメロディーが私の手帳に書き認められた。

私は手帳に書き取つてから尙面白いリヅムに醉つて一生懸命に手の使ひ方なんかを注意して居た。所がソコへ巡査がサーベルをガチャリガチャリと音させて入つて來た。すると三人の小女はお互に手を合したまゝ、巡査の顏を見つめた。巡査は一寸三人の方へ眼を注いだがスタスタと出て行つてしまつた。占たと言つた調子で又三人は歌ひ出した。

私は此の停車場の待合二三十分の間に子供より偉大なる教訓を得た。道は近きにあり。眞理は決して遠い所にばかりあるものではない。我々の學び得るものは大學の教授や、肩書のある學者のみではない。御用學者が非論理な議論をこね廻して居る間に無邪氣な兒童は自然の眞理を歌つて居るのである。右の歌謠でも解る通り、歌に何等の意味もない。――或は最初に意味のあつたものが口々に轉訛してサッパリ意味の解らぬ樣になつたのかもしれない。又そんなものもあると推察されるが、右の歌なんかは最初から意味があつたものだとも思はれぬ。――意味がなければ無味乾燥ではないか、所が此の意味なき無味乾燥な歌を喜んで歌ふではないか。學校の唱歌は其所のけにして歌つて居るんだ。此所だ。大人の心理で以て子供を批判してはいけない。右の歌にした所が頭音がイ、ロ、ハ、と變化して行くだけだ。童謠は多くはイ、ロ、ハ、と連續するかヒ、フ、ミ、と連續するか又は尻取(しりとり)となるかである。そしてあまり深い意味もなく多くは意味をなさぬものが多い。今イ、ロ、ハと連續するものを擧げて見ると、先の歌も此の部に屬するのであるが、

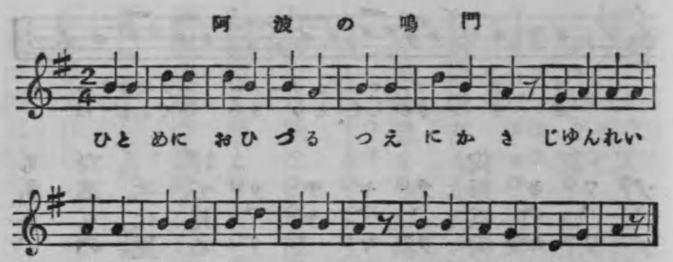
炒豆、蠟燭、巴旦杏、人參……

と言つた風に次第にイ、ロ、ハに依つて名詞が不系統に無意味に羅列される。次にヒ、フ、ミ、と連續して行く例を擧げると。

一人來な、二人來な、見て行きな、寄つて來な、何時來て見ても、なゝこの帶を、やの字にしめて、此所の町で、十よ。

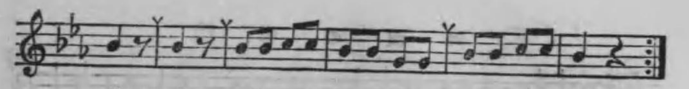
何の意味かサッパリ解らぬ、一寸難かしいものだが「阿波の鳴門」と言ふのがある。

人目に負づる杖に笠、順禮姿で父母を尋ねよかいな。
ふだらく紀州は御熊野の。那智山お山で音高く響かうかいな。
見るにお弓は立ち上り、盃に白げのこゝろざし進じやうかいな。
ようこそ巡禮さまはりやんせ、定めしお連は親御達、同行かいな。
いえいえ私はひとり旅、とゝさんかゝさん顏しらず、逢たいわいな。
むりやり包んで此金を、いやがるお鶴の花ひけに持たさうかいな。



なく子をだいたりすかせたり、いもどりこもどり、後もどりもどさうかいな。
山坂お鶴は觀音寺、せつかく尋ねて來たお鶴、いなさうかいな。
九つなる子の手を引いて、十郎兵衛やかたの表門入らうかいな。
とうとうめぐるに會たとて、我子と知らずに十郎兵衛が殺さうかいな。

是は上の樣なメロディーである。尙之と同じメロディーで「人目しのんだ頰被、被つても知れます龜どんえ」。「二人□□□□□□よさは、たれも知らずに□□□□□□うれしいわいな。」と言つてヒ、フ、ミ、と連續して行く、それは頗るデカタンの



もあり、「人も通らぬ山路を、おさよさんと元兵衛さんの色ばなし。」と言つた風なのもある。尙赤穗義士を歌つた同じメロディーもある。

次に尻取りを調査して見ると是れも隨分に澤山あるが、今は一つ二つ擧げて見る。

リ、リ、李鴻章の鼻べつちや、
チヤ、チヤ、ちやんちやん坊主の生捕や、
ヤ、ヤ、山縣大將劍ぬいて、
テ、テ、帝國萬歳大勝利「リ、リ、李鴻章の……と元へもどる。）

尙豐臣秀吉を歌つたのに、

キ、キ、木下藤吉秀吉は、
ワ、ワ、我國一の英雄ぞ、
ゾ、ゾ、草履取りから出世して。
テ、テ、天下を一手に打おさめ、
メ、メ、冥土の土產に今いつちよ、
チヨ。チヨ、朝鮮征伐いさましさ、（キ、キ、木下藤吉……と元へもどる。）

右の歌なんかは大體意味が取れるが、テンデ意味のつづかぬ歌が多い。

松蟲鈴蟲くつわ蟲、むしたお米で餅をつき、つくへの上には本をたて、たて縞横縞

こんがすり、すり餌で飼ふのは籠の鳥……

と言つた風なのがある。實際細かく調べて見ると隨分に澤山にあるが今は是れ位でよして置く事とする。只此所に注意すべきは彼等の童謠の研究である。小學校の唱歌の研究は先づ童謠から入らなければならぬ。そして只歌詞の研究ばかりに止めてはだめだ。さつとそのメロディーを研究して五線の上に現はして見る事だ。童謠の價値は歌詞ばかりではない。メロディーには頗る深い意味がある。

私は停車場の二十分間に大なる教育的教訓を得た。ひたはしる汽車の中で幼き舊時

の回顧にふけつた。子供は大人ではない。子供は何所迄も子供である。大人は何所迄も大人である。大人が如何に巧妙に眞似ても子供にはなり得ない。だから大人の心理で以て子供を律してはいけない。小學校の唱歌はハイドンでもベートーフェンでもない。殊に無暴なる教訓づくめの文部省の尋常小學唱歌では更にない。私は嘗て或る小學校の唱歌を參觀した時、小山作之助氏編重音唱歌集の卷二所收「想起」を尋常四年の女子に教へて居るのを見た。教授者は女先生であつた。私は驚いた。「想起」の曲はウエーベルより採つたもので歌詞は阪正臣氏の作、次の通りである。

よどまぬ月日は、早川なれや、流れて歸らず、隔たりゆきぬ、父母ならびて黑髮なでし、幼き昔を思へば戀しや。

三番までであるのだが、之は大人が幼時を回顧した情趣である。「幼けき昔を思へば戀しや。」を見てもよくわかる。無鐵砲も甚だしい。之を尋常四年の女子に教へて居る。尙又或る他の學校で同じく尋常四年の男子に、之も女の先生が東京音樂學校で作つた「中學唱歌」中の「駒の蹄」と言ふのを教へて居た。右の歌は讀者もよく御承知だと思ふがメロディーは別としても第一番の歌詞が次の通りである。

行け行け男兒、日本男兒、墳墓の土地をいづことといはむ、六大洲中、縱橫無盡駒の蹄のとゞまるところ。

となつて居る、實際子供を馬鹿にしたものであると言へる。子供を殺して居る。大人であるべき教育者が「何と之は面白いなア！」と感じた歌でも、子供は果して「何と面白いなア！」と共鳴して來るであらうか？　大人のエルレブニスは決して子供のそれとはちがふ。からして大人の心理に子供が共鳴しないのは無理もない事だ。例へば文藝的の作品にした所が同じ事だ。如何に天才の殘した藝術品があつても、俗惡なる

沒趣味無理解の低級な人間には何等の感銘も與へない。藝術の鑑賞と言ふ事は作者と鑑賞者との共感性を根本的の土臺として成立するものであるから、エルレブニス Erlebnis) の內容そのものが全然相異して居る爲に共感性がないのである。

大人が面白いと思つて教へたならば誤りである。それは小供と大人とのエルレブニス其物が全然に相異して居るからである。私は前の唱歌を參觀した時に受持の先生に問ふてみた。「よく歌ひますか。」と。所が受持の先生は「ハイなかなかよく歌ひます。」と答へた。次に私は「では歌詞の意味がわかりますか。」と聞いた。「はい說明してやりますとよく理解します。」と。私は可笑しくなつて來た。第一歌詞の說明をしてやらなければ何の事だか理解が出來ないやうな歌を教へると言ふ事それ自身がすでに誤つて居る。次に教へたならばよくおぼへるからとてどんな歌を教へても良いのとはちがふ。前に出した「想起」にした所が、「駒の歸」にした所が、尋常四年生に教へて絕對におぼえ得ぬと言ふ事はない。おぼえるからとてどんな歌曲を教へても良いと言ふ理論はない筈だ。丁度幼兒に食ふからとて脂肪分の多い洋食を滋養になるからとて食はせるのも同じ事だ。歌曲を歌ふ事は歌ふやうに、洋食も食ふ事は食ふ。しかし直ちに下痢してしまふ。所で洋食の下痢はよく親にわかるが、唱歌の下痢は一寸わからぬ。そこで無鐵砲なる歌曲を歌ふからとて注ぎ込む。何も知らぬ生徒は之が教育的下痢の食物だとは知らずに、只先生の仰にしたがつて食つてしまふ事になる。あはれ全國幾百萬の兒童は如斯にして無自覺な教育者に殺されて居るのである。罪な事ではないか？

讀者は私が今二三の童謠を此所にひき出す事を許してもらい度い。

1 一ィ二ウ三ィ四ウ。

四方の景色を春とながめて梅に鶯ホヽラホケキョと鳴いた。明日は祇園の二軒茶屋で琴や三味線噺子てんてんてまり歌。歌の中山チョ六々々チョ七々々チョ八々々チョ九がくんじゆでチョと一貫つきました。

2 一ィ二ウ三ィ四ウ。

よろづ吉野のかややかちぐり、ほんだァらは、十うでとうせと谷底見れば、ほながやゆづり葉、大松小松、名古屋の城は高い城で、一段まる山二段まる山、三段上つて東を見れば、良い良い良い子が三人づれで、一でよいのは絲屋の娘、二でよいのはにの屋の娘、三でよいのは酒屋の娘、酒屋娘は器量がよつて、京で一番大阪で二番、嵯峨で三番吉野で四番、御所で五番の帶こうてもろて、帶に短したすきに長し、今度生れた子のはら帶に、はら帶に。

3 一イ二ウ三イ四ウ。

みよの山から水ふく鐵砲八方、はりやのはやし、御池の千鳥、朝さく花は、さくかさかぬか今さき候、同じめくらが杖ついて通る、そこチョットのいとくれ、のく事なりませぬ、おかみの世話で、金らんどんす、チヤコのまくら、そらちとうそや、うそでごんせん、ほんまでごんす。

諸君、右の二三の童謠を讀んで如何に感じたまへるや。私は此の大人の心理狀態よりする觀察に於て、果して此の樣な歌謠が面白からうかと思へる——疑はるゝ——斯如きものをしも子供は大變に悅んで歌ふのである。子供にとつてはハイドン以上でありモツアルト、シユーベールト以上である。私は文部省の小學唱歌集や、前引「想起」「駒の蹄」なんかを敎へて居る人々の赤面しなければならぬ面白い皮肉だと思ふ。之等の童謠は子供の心情には「想起」以上の傑作であり「駒の蹄」以上の名謠である。學校で「駒の蹄」や「想起」を敎はつて來た子供が家へ歸つて樂しうお友達と遊ぶ時には「イららんがイつさいこく」である。「よろづ吉野のかややかちぐり」である。子供の世界は決して大人の亂入を許さぬ神の樂園である。大人の心理を以てしては一歩も入る事が出來ぬ城郭である。學校敎育と兒童の心理！　何たる矛盾であるか？　何たる皮肉であるか？　その矛盾その皮肉をも知らず、歌ふからとて歌はせて居る敎育者の無智よ、無自覺は眞にあはれむべきではないか？

私は全國に渡つて種々の形式の童謠を列擧する事を得る材料を持つて居るが今は之

等の繁雜をさける事にする。尚近畿地方を中心としての童謠のメロディーも五線紙の上に現して見たが何れ改めて筆硯を新しう書く事としやう。大體に於て右の二三の引例で以て童謠なるものを味ひ得やうと思ふ。私は北原白秋氏の「赤い鳥童謠や」「トンボの眼玉」などを拜見したが、北原氏や西條八十氏の作謠が從來無自覺であつた小學校の唱歌教授に對して、大なるヒントを與へた事は事實である。之等諸氏の作謠には成田、山田、小松等大家の作曲がついて居る。中には子供に歌はせるにしては今一歩と言ふ樣な點がないではない。しかしそれは止むを得ない事である。と言ふのは北原氏や西條氏は教育者ではないし、山田氏や成田氏は音樂專門家であるのだから、そして又之等の諸氏は子供ではない大人であるから、それ等作謠や作曲が童謠として理想的なものだとは言ひ兼ねるけれども、確にそれぞれ立派なもので、教育的に大なる價値のある事をいなむわけには參らぬ。

私は「赤い鳥童謠」が歌曲ともに續々出版されてゆく事がうれしくてならぬ。只今五六冊出て居る樣に思つて居るが、今後も各種の方面からかゝる立派なものが澤山にあらはれる樣になつてほしいと思ふし、新聞や雜誌に出る童謠なんかには教師自ら作曲して歌はせてほしい。尚出來るならば兒童に作謠せしめ更に作曲までもさせたいものだと思ふ。私の知つて居る學校ではどしどしと作謠作曲をさせて居るがなかなか立派なものが出來て居るのである。

私は「赤い鳥童謠」を拜見して特に感心したのは——只今私の手もとには第一集しかないからそれだけで申すのだが——「かなりや」である。曲は少々むづかしいけれども、あれをほんとうに上手に歌はせたら、文部省の唱歌なんかは、いやがつて歌はなくなつてしまふ。尚「赤い鳥」の雜誌で見たが、北原氏の作謠「ちんちん千鳥」などは歌曲ともに眞に見上げたものである。之等の童謠を歌ふ時、我々大人も子供になつた樣な感じがする。

話は横道の方へそれ出した樣だが又本に戻つて再び自然的に存在する童謠より私の

考察を引き出す事とする。彼の大人からは無意味なり無趣味なりと考へられる童謠も子供に取つては大なる寶玉であり、ショパンの作品以上の名曲である。「イの字イつさいこくイんじうらん。」は神の樂園に遊ぶ兒童の宇宙唯一の名曲なんだ。日本の兒童の作品である。日本の音樂教育家は何の面目あつてか子供に對する事が出來やうぞ。所で音樂を十分に理解しない教育家の内には困つた事をやる者がある。現今小學校の歌詞歌曲中には眞に國民性に適當したものがないとかで、大人の俗曲を子供に教へると言ふのである。誤解も又甚しいものである。例へば、

1 磯で名所は大洗樣よ、松が見えますほのぼのと松がね……（磯節）

2 宇治の柴船早瀨を渡る、私しや川舟で浮かれゆく……（宇治の川船）

3 めでためでたの若松樣よ、枝も榮えるホイホイホイ……（木遣音頭）

私は大人の俗曲にも隨分に良いものもあると思ふが果して右の樣な俗曲を教授細目中に編纂して置き、大人ならぬ子供に如何なるインテレストを起さしめ得るであらうか。私は大人が藝者と交つて酒の機嫌でさはぐ場合、ヤッチョロマカセも良からうし鴨綠江節も良いと思ふ。が教室の中で果して兒童がこんな歌に共鳴するか否かは疑問である。所が主張者は實際學校で常にやつて居ると言ふ事である。何でも大人が面白いとか良いとか思つて之を子供に押し賣りをする程に教育上害のある事はない。無論私も俗曲中に其のメロディーの良いものゝある事を認める。がメロディーや歌詞が大人の心理に良いと影寫するからとて之を直ちに兒童に押し賣りをするてふ事は惡い極みである。森羅萬象子供に教へて惡いものは無い筈であるが、さりとて之もあれもと藥屋の効能書きの樣に並べ立てた所で下痢の原因となるの他何の功果をもたらすものでない。私は右の樣な大人の俗曲を子供に味はしめると言ふ事は、それが曲想の上から、それが歌詞の上から、それが道德や教育の上から、又はそれが國民性に適不適の上から隨分に異議もあると思ふが、あまりに解りすぎた事であるから今此所にくどくどしう論じない事にする。只右俗曲論者が何故に自己の幼なかりし當時を內省して我

國の各地に――子供の世界に――歌はれて居る子供の俗曲を調査しなかつたか？　其のメロディーに學ぶ所がなかつたかを遺憾に思ふものである。

子供の歌ふ歌は自然の聲である。卽興詩である。私は此の自然の聲を尊ぶ。子供の卽興詩を尊ぶ。音樂學校――日本の――出のなまじい音樂家の音樂よりも何れほど自然の聲が眞の音樂として出來上つて居るかしれない。出た出た月が、丸い丸いまんまるい……」と言つた文部省の歌よりも、「お月さん何歳、十三と七つ、それはまだ若いなあ。」といつた調子が眞に自然であり、兒童的である。文部省尋常小學唱歌に數へ歌と言ふのがある。尋常三年だつたと思ふ。（私はメロディーも此所に種々變つたのを擧げ度いが、實は五線の印刷が大變に手間がかゝるので總て省略する事にした。左樣御承知を願つて置きます。）次の通りである。

一つとや、人々忠義を第一に、あふげや高き君の恩國の恩。

二つとや、二人の親御を大切に、思へや深き父の愛母の愛。

三つとや、幹は一つの枝と枝、仲よく暮せよ兄弟、姉妹。

四つとや、善き事たがひにすゝめ合ひ、惡しきをいさめよ友と友人と人。

五つとや、いつはり言はぬが子供等の、學びのはぢめぞ愼めよ、いましめよ。

六つとや、昔を考へ今を知り、學びの光を身にそへよ、身につけよ。

七つとや、難儀をする人見る時は、力のかぎりいたはれよ、あはれめよ。

八つとや、病は口より入ると言ふ、飲物食物氣をつけよ、心せよ。

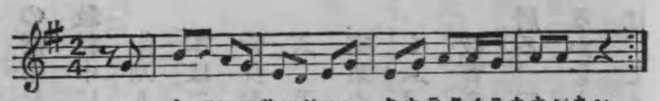
九つとや、心は必らず高く持て、たとへ身分はひくくとも輕くとも。

十とや、遠き祖先の敎へをも、守りてつくせ、家の爲國の爲。

何たる悲慘な唱歌であるか？　道德づくめの歌謠の何所に自然の音樂のメロディーが流れて居るかを考へて見よ。音樂は道德の奴隷ではない。音樂を道德が使丁として何所に自然の感情の流れがあるか。こんな歌を歌はせるから子供は叫んだり嗄鳴つたりするんだ。歌へるものか一度歌つて見るが良い。殊に九番の「たとへ身分はひくく

とも輕くとも、」など言ふ歌詞に至つては人を馬鹿にしたものである。文部省が國民を馬鹿にしてかゝつて居る者でなくて何であるか。他方で修身書なんかに「職業に貴賤なし。」だとか、「人は萬物の長。」だとか、そんな事をたとへ敎へないまでもデモクラシーの議論が盛に起つて居る世の中であるではないか。こんな馬鹿げた歌曲が堂々文部省の敎科書中に存するのだからたまらぬ。兒童の世界には比較にならぬ數へ歌の良いのが澤山ある。今左に一つ擧げて見るが、こんな立派な音樂に對して果して文部省の數へ歌、何の顏色がある。

一つひよつこはまゝ食ふてたいらかねんねん。
二つ船には船頭さんがたいらかねんねん。
三つ店にはおもちやが平らかねんねん。
四つ横町には車引きが平らかねんねん。
五つ異人さんが手を取つて平らかねんねん。



六つ昔はよろひきてたいらかねんねん。
七つなきみそなきづらでたいらかねんねん。
八つ山にはこんこんさんが平らかねんねん。
九つ乞食がお椀もつて平らかねんねん。
十で殿樣お馬にのつてたいらかねんねん。

たれが作つたのか、いつ頃出來たのかは詳でないが、子供の世界と言ふ自然の樂園の中には春風にそよそよと交つて、こんな立派な音樂が聞えて來る。之を道德づくめの文部省の數へ歌と比較して見るが良い。自然の立派な、こんな立派な音樂を歌つて居た神の樂園から、無慘にも引きづり出して、「一つとや人々忠義を第一に」とやらせるのである。「六つとや昔を考へ今を知り、學びの光を身にそへゝ身につけよ。」なんかとやらせる。若し神が審判をするのであつたら私はさぞ神は泣くだらうと思ふ。私は實に此

の慘事を泣かずには居られない。あゝ何たる罪な事であるか。同じく文部省の二年の教材中に。

柴刈りなはない草鞋を作り、親の手をすけ弟を世話し、兄弟仲よく孝行つくす、手本は二宮金次郎。

骨身をおしまず仕事をはげみ、夜なべすまして手習讀書、せはしい中にも撓まず學ぶ、手本は二宮金次郎。

家業大事についへをはぶき、少しの物をも粗末にせずに、遂には身をたて人をもすくふ、手本は二宮金次郎。

教育者の教へる樣な唱歌、文部省の選擇する樣な歌曲は之位なものに高がきまつて居る。二宮金次郎だとか上杉鷹山だとか、そんなものが現在の小學校の生徒に共鳴するかをよく考へて見るがよいと思ふ。現今の子供は、罪もなき子供は、無邪氣な子供は、こんな歌曲で毎日學校で殺されて居るんだ。可愛さうな事だ。

私は歌詞よりも歌曲の方をより多く此所で研究したいと思つて居るが、どうも曲を印刷する事が至つて困るので略する事とした。只一言曲について言つて見ると、文部省の唱歌の中には一つとして子供の心情に共鳴する樣なものがない事である。總てが大人のメロディーである。聲域の方や調子などは大體に於て承知が出來るが、メロディーと來ては殆んど物にならぬ。之を歐米各國の小學校用歌曲に比較して見るが良い。

第二　子供は即興詩人であり音樂家である

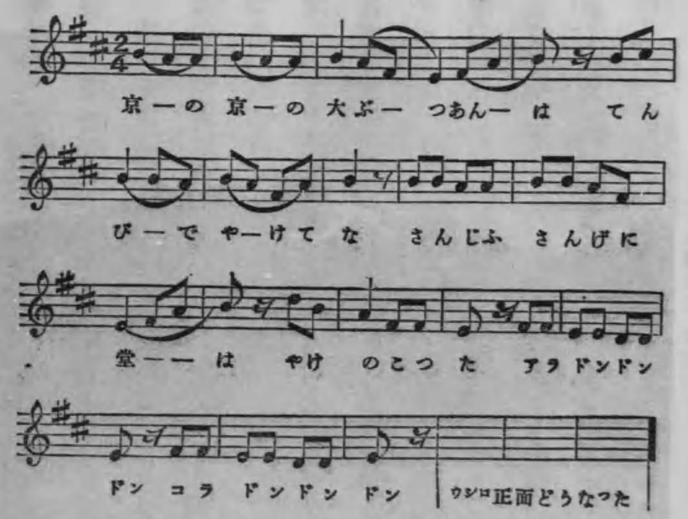
京都では八月十六日盂蘭盆の夜、東山に大文字がともる。蒲團着て寢たる妻の東山が追々と黑ずんで來ると比叡山から涼しい夏の夜風が吹き下すので、市中の人々は手に手に團扇を持つて二階の手摺や屋上の物乾臺などに上り、首をのばして今か今かと大文字に火がつくのをまちわびて居る。午後八時になると山の頂上にポッと一時に煙

が上ると見るや、山頂を殆んど占領した形にそれは大きな大文字が全市に輝く。「そら！　ともつたともつた。大文字がともつた。」子供は直ちに即興的に歌ふ。「ともつたともつた、大文字がともつた。」「いんでこ大文字。大文字がともつた。」それは實際上手に歌ふ。舊都の盂蘭盆は昔ながらの大文字が子供の即興詩的なメロディーのみやびやかさを以て何とも言ひ得ぬ古典的な感じを起さずには居られないのである。舊都の名物大文字が子供の心に寫つて無邪氣な、清らかな、美しい即興詩が「いんでこ大文字。大文字がともつた。」と言ふメロディーとなつて歌はれるのである。まことに子供は立派な即興詩人であり、幼ない作曲家である。舊都の盂蘭盆は此の即興詩人がありこの作曲家があつてこそ平安の昔の如く靜にみやびやかなのである。

澤山子供が集つて手を取り合つて歌ふのも夏の夜である。小さな家の中には暑くて居られないから大人も子供も町に出て涼む。同じ位な年輩の子供が手を取り合つて圓陣を作り、「京の京の大佛ツアンは天火で燒けてナ、三十三間堂は燒け殘つた。アラドンドンドン、コレドンドンドン、うしろ正面どうなつた。」中に入つた一人の子供が自分のうしろと正面との人の名を指す。

「前は花さんうしろは千代子さん。」と言つた風に、そしてそれが眞に樂しさうな嬉しさうな勇ましさうなメロディーで歌ふのである。立派な音樂であり立派な即興詩である。今其のメロディーを取つて五線の上に現はすと次の樣な形に出てくるのであ

京の大佛



る。或るモチーフが現れ次に少し變化したモチーフが現れ、それが順序よく繰り返されて「アラドンドンドン、コラドンドンドン。」のメロデーに移つて居る。立派な旋律である。

月を見ては「お月さんいくつ、十三と七つ、そりやまだ若いナア。」とやる。星を見ては「一番星みつけた。あしたの朝福おくれ。」「一つ星が飛んだ。二つ星が飛んだ。三つめには歸ろう。」など何のてだはりもなく幼げな無邪氣な口から流れて出るのである。風がふくと「天狗さん

風おくれ。風がなけりやゼニおくれ。」雷が鳴ると「雷落ちよ。桑の棒でタヽクゾ。」恥もなければ外聞もない。大きな聲で平氣でしかも一生懸命に歌つて居るのを見ると、今一度子供になつて見度い樣な氣がするのである。彼等は直ちに物にふれ心に感じて卽興詩をやるのであり、又それが立派な音樂のメロディ！となつて口からもれて出るのである。子供の世界は大人の一歩も入るを許さぬパラダイスである。神曲の園である。自由なる樂園、神曲の園、子供の世界には、メンデルスゾンもなければシューベルトもない。リストもなければチャイコフスキーもないのである。裸體の世界に天使の口づさむ旋律が流れて居るのである。ベートーフエン以上であり、モツアルト以上である。そしてそれ等の天使はゲーテやハイネ以上の作詩を何等の努力もなくするのである。嗚呼美しくも樂しき子供の世界よ。大人は決して此の境地に亂入する事が許されないのである。私は今少し此等天使の歌ふ歌を聞いて見度い。

一ハイ二ウ三イ四オ

みよの山から水ふく鐵鉋八方、針屋のはやし、御池の千鳥、淺草の花は、さくかさかぬか今さき候、同じめくらが杖ついて通る、そこちよつとのいとくれ、のく事なりませぬ、おかみの世話で、きんらんどんす、チヾコの枕、ソラチトウソヤ、ウソでござんせんホンマでござんす。

二お鶴の吸物、お龜の吸物、一バイすゝろ、二バイすゝろ、三バイ目には肴がないのでお腹だち、それでやうやう一かん貸しました。

三すゝろすゝろ、一ぺんすゝろ、二へんすゝろ、三ぺんすゝろ、四へんすゝろ、五へんすゝろ、六ぺんすゝろ、七へんすゝろ、八へんすゝろ、九へんすゝろ、十ぺんすゝろ、すゝろすゝろ。

實際此の樣なものを列擧するならば際限がないが、又各地には各々異なつた種々面白い天使の聲を聞く事が出來ようが、私は本書で他に澤山書く事があるので、話を次に運ぶ事としやう。

さて子供は天使である。卽興詩人であり、可愛いゝ作曲家である。所が日本では家庭や學校に於て此天才的音樂家を――天使の聲を破壞して居るのである。從來の唱歌科は決して音樂教育ではない。先生御自身も御わかりにならないのだから致し方がない。明治學制も不思議はない。先生御自身も御わかりにならないのだから致し方がない。明治學制發布以來少くとも半世紀、その長い間に全國の教育者は天使の聲を破壞して居て平氣だつたのである。

私は第一に子供に叫ばせたり呶鳴らせたり、又は唸らせたりしては決していけないと思ふ。歌を歌ふ事はそれが子供にとつて苦しかつたり無趣味であつたりしてはいけない。子供に何等の感興も趣味もない時にはスグ叫んだり呶鳴つたり、又は唸つたりするのである。唱歌と言ふ學科はそんなに叫んだりするものとちがふ。そんな事をするから大切な天使の聲をいためてしまふのである。多くの小女學校の唱歌教授を見ると、その殆んど全部が、自然の美聲の所有者である天使の妙なる音を殺してしまつて

居るのである。唱歌教授で以て良くするのでなくて惡くして居るのである。聲域に合はないような歌や、歌詞の意味のわからないようなものを歌はせてみて平氣で天使の美聲をこわして居たのである。

唱歌は歌はざるを得ぬのである。歌ふと言ふ事が愉快なのである。手の舞ひ足のふむ處をしらず歌はないでは居られないから自然口に出てくるのである。無理にも歌はなければ點數がもらへないから歌ふのではない。歌ふと思はないで獨り歌へてしまふのである、それが眞の唱歌である。無理に歌ふのは唱歌ではない。自然の呼氣の流れが歌となつて口から出て來るのである。學校の唱歌はそれでなければいけない。

先生が先づピアノを彈いて見る。次に一度歌つて見る。そしてその歌曲や歌詞について一通りの說明を十分に面白くして見る。子供はもう立つても居てもゐられない樣になつて、「先生早く敎へてください。」と叫ぶ。先生のバートンと足拍子に合せて生徒は歌の中の人となつてしまふ。どんな大きな雷が鳴らうとそしらぬ顏して平氣で歌つて居る。子供が歌を歌ふのか、歌が子供を歌はせて居るのかわからぬ。先生のバートンが左右上下に動く樣に、子供が歌ひつゝ踊り出すのである。先生も面白くなつて子供と共に踊り出すのである。此處に至らなければ眞に唱歌教授は出來ない。そうなれば既に先生でも生徒でもない。同じ人間として踊り上るのである。歌の氣分がピッタリ子供の心情に合するのである。子供はちやんと椅子に行儀よく坐して居つても心は飛び上つて居るのである。はね上つて居るのである。

私は從來の唱歌教授について顧み度いと思ふ。從來の唱歌教授は强いて歌はせるのである。文部省檢定濟と言ふ型にはまつたむづかしい意味の歌をコヂツケて作曲したものである。そんな子供の感興も何もないものを無理に歌はせるのである。子供も面白い事はないから叫んだり唸つたり呶鳴つたりするのである。

先づ從來の文部省檢定の小學校の唱歌を見よ。そこにどんな子供らしい氣分があり、幼けない感興が流れて居るか。修身の格言を無理に五七や七五調に直した樣なも

のや、それは大人の考へた悲哀とも靜かなともわけのわからぬメロディーをつけて見たり、西洋の名曲を取つて來る事はよいとしてそれに太平記や徒然草の樣な古めかしい死文字を並べて見た樣な歌の何處にも子供のインテレストをひく樣なものはないのである。

大體に於て唱歌に歌詞の說明をしてやらなければ子供はインテレストを起さないと言ふ樣な歌を敎へると言ふ事は誤つて居る。歌は一度先生が歌つてやれば子供には直ちに直覺的にわかるものでなければいけない。歌の說明をしなければ歌の意味がわからぬと言ふ樣なものを敎へる事は大なる誤りである。歌詞を感興的に說明する事は必要な事であるが、文章の意味を說明する——國語讀本の形式內容敎授のやうに——などは何等の價値もない死敎育である。

先づ私の小學校時代を內省して見る。「道は六百八十里」などの歌や、「箱根の山は天下の嶮。」などゝ言ふ漢文體の歌を尋常四年生位で敎へられたものだ、歌はせれば歌ふと言ふだらうがそんなに子供の感興も引かないものゝ何處に敎育的の價値があり得やう。今でも——現今の敎育界を見渡しても——「箱根の山」式のものを尋常小學校の生徒に敎へて平氣で居る敎育者が澤山あるのだ。かゝる歌曲論や歌詞論は別に書くが、今でも「荒城の月」や、「遠別離」、ことに「寄宿舍の古釣瓶」と言ふ樣な飛んでもない歌を尋常小學校の生徒に平氣で敎へて居る人も澤山あるのだから驚く。

中等學校の音樂敎員でもその通りで、中等音樂敎員は主として音樂學校出身者が多い。そして音樂の曲の方は相當の力はあるとしても歌詞と言ふものはテンとわからぬ。何れにしろ歌詞と言ふ文學的な方面はわからぬ。總て敎育音樂は曲のみを考へる事は出來ない。歌詞と曲と兩者を十分に考へなければならない。歌詞も曲もピッタリと合つた眞に感情の上から適當なものを選擇する必要がある。此處で作曲者と作歌者とは夫婦の關係でなければならない。歌詞の氣分は歌曲に現はれて居り曲の氣分は歌詞にピッタリ合つて居るものでなければならない。外國曲に歌を付けても良い、歌を

作つてそこへ曲をつけても良い。要するに作歌と作曲とは夫婦の樣にピッタリ氣分のあつたものでなければよくない。ピッタリ合つた處に良い子供が生れるのである。

近頃中等學校などの教科書や唱歌集も澤山出るやうであり、外國の良い曲などを澤山に引いて來たものに日本人の作つた歌詞をつけて居るが、曲の採り方はもとより歌詞ときては眞に困つたものばかりである。女子の生徒などのインテレストを引く樣なものは少ない。殊に男生徒の唱歌の歌曲ときては殆んどないと言つて良い。

第三章　音と色との綜合藝術

第一　ネ(音)とオト(音)と

物理學上の音については只今此所に說明する必要がない。それは澤山の音響學や音學の原理を說明した書物が坊間に出版されて居るからである。兎に角「音」とは或る發音體の振動が空氣の仲介に依て吾々の聽感覺に感ずる事それ自身又は感じた刺戟を稱して言ふのである。音は吾人の耳にあるか又は發音體にあるのか。吾人の耳はなくとも發音體や振動物を非定する事は吾々の經驗的には出來ない事だとすれば、音は耳にあらずして他の物體にあると考へられる唯物論となり、吾人の耳がない時には如何に振動體はあつても音として認識する事がないから音はないと考へる時、認識者自身の知覺を本體とするから音は唯心論的にないと考へられる。しかし此の問題は頗る困

つた問題である。と言ふのは第一心と物とは別物であるか否かと言ふ大問題をきめてかゝらなければきまらぬからである、例へば一本の針を石の上に落した。其の時チンと音がした。此のチンと言ふ音は針にあるのか吾人の耳にあるのか又は仲介者の空氣にあるのか。之は問題とするのにはあまりに複雜であり、本書の主要なる部分ではないから略する、本節では此のチンと言ふ音を「ネ」と言ふか「オト」と言ふかの問題である。

昔から「音」の事を「ネ」と言ひ又「オト」とも言つた。「ネ」と「オト」とはどんなに區別があるものだらうか、私は少しく考へて見たい。尙別に「聲」と言ふ言葉もある。しかし之等を確實に區別する事は頗る困難であり、要するにひとまとめとすれば吾々の聽覺に感ずる總てを稱して「オト」と言ひ又は「聲」と言ふのだと言へば總てが同一物に對する異名となるから、要するに同じ事だと言ふより致し方がない。事實同じ事なのである。物理的又は心理學的に考察するならば總て同じ事であるが、その同じ物に對して或は「オト」と言ひ或は「ネ」と言ひ又は「聲」と言ふのは何故であらうか。私は之は只吾々の感じによつて言葉の綾をつけたまでだと思ふ。「オト」と言つた方が「ネ」と言ふよりも言葉の上に綾がある場合には之を「ネ」と言はないで「オト」と言ひ、「ネ」と言つた方が都合のよい場合には「オト」と云はないで「ネ」と言ふのである。ッマリ一つの綾であるとおもはれる。

「オト」と言ふ言葉は動物の聲にも使ふのであつた事は昔からの歌や文章を讀んでみればよくわかる。つまり動物の聲を「オト」と言ふ言ひ方がある。萬葉集卷五に、

鶯の於等聞くなべに梅の花、わぎへの園に咲きて散るみゆ。

とあつて鶯の聲の事を「オト」(於等)と詠んで居るのを見てもわかる。尙、躬恒集に次の歌がある。

いづらなる山にあるらんかりがねの、おとぎゝ高くきこゆなるかな。

とあつて「かりがねのオト」とある。かりがねの聲を「オト」と詠んで居る一例であ

る。だかち「オト」は動物の聲の時にも使はれる。動物でないものの「音」を「オト」と云ふ事は例をあげる迄もない事であるが、動物の聲の場合に於ても「オト」と言ふ事が出來るのは前にあげた二つの歌でよくわかる。尙其他動物の聲を「オト」と言つた例は澤山ある。

次に「ネ」である。之も例を擧げて說明する必要はない程に澤山の例があげ得られる。先づ動物の聲を「ネ」と言ふ例をあげれば、古事記に、

たづが泥の聞こえむ時は云々、

とありて鶴の聲の事を鶴の泥(ネ)と言つて居る。又萬葉集十七に、

見渡せば卯の花山の子規、鵺のみしなかゆ云々。

と出て居る。之も子規の聲を、子規の鵺(ね)と詠んだものである。

後選に、

ねにたてゝなかぬ日はなし鶯の昔の春をおもひやりつゝ。

萬葉に、

岩がねのこゞしき山を越えかねて、哭泣(ねなき)とも色に出でめやも。

古今に、

わが園の梅のほづえに鶯の、ねになきぬべき戀もするかな。

萬葉に、

つるぎ太刀身に添ふいもを取り見かね、哭乎曾奈伎(ねをそなき)つることにあらなくに。

古今に、

忘らるゝ時しなければあしたづの、思ひみだれてねをのみぞなく。

右に擧げた樣な例は何程でもある。動物の聲を「ネ」と言ふ例である。動物でないものゝ「音」を「ネ」と言ふ例は今此處に擧げる迄もない程澤山ある。ピアノの「ネ。」オルガンの「ネ」と言ふ樣な例である。琴の「ネ。」きぬたの「ネ」などである。

枕草紙五に、

まだねもひきとゝのへぬ琴を心ひとつやりて云々。

とあるが如きは琴の「オト」を「ネ」と言つた例である。

私は或る人から歌の會合の席で「オト」と「ネ」との區別問題が起つた時、故須川信行氏（御歌所寄人）が之を說明して、

「ネ」とは遠き「オト。「オト」とは近き「ネ。」

と說明された由を聞いた。氏は歌人であるから和歌の上から又は國文學上右の樣な區別を體驗して居られたものかも知れない。今須川氏の說明から考察すると次の考も出て來る。

弱き「オト」を「ネ」と言ひ、强き「ネ」を「オト」と言ふ。

須川氏の說明は當然右の樣な考に立ち至るのである。遠き「オト」とは弱き「オト」であり、近き「ネ」とは强き「ネ」と言ひ得る。然らば「オト」と「ネ」とは音響の遠近と言ふ區別となり、音響の遠近と言ふ事は、音響の强弱と云ふ區別となる。まことに一理ある說明である。

實際「オト」とか「ネ」とかを其の發聲體の種類から——發音體の區別から——區別する事は出來ないとおもはれる。例へば鶯の「コエ」とも、鶯の「ネ」とも、又鶯の「オト」とも言ひ得るからである。しかし物によつては「オト」としか言はなかつたりする事はあり得る。雷の「ネ」も變だし、雷の聲も少々變だから、としか言はなかつたりする事はあり得る。雷の「ネ」も變だし、雷の聲も少々變だから、矢張此の場合は雷の「オト」と言つた方が言葉の言ひ廻しがよいとおもはれる、要するに「ネ」と「オト」とは言葉の綾の上からの感じである。それが對象的にも物理的にも區別の出來るものではないのである。

此所で考へなければならない。動物には聽官があるから音聲を聞く事が出來る。例へば馬でも牛でも蟲でも音を聞く。しかし人間の樣に正しく、又それほど細かくはない。大阪の動物園かどこか今確實に記憶に存せぬが、動物にオーグストラを聞かせて試驗した相である。私は新聞記事にて知つたのであるが、動物によつて大變に音に感

ずる差異がある相である。その新聞の切り抜きを失つたから此處に書く事は出來ないが、動物でも音聲を音聲として聞く事は出來るのである。しかし人間程に細かくはない。又人間程にセンチメンタルではない。人間が音についてしかくセンチメンタルであるのは高等動物である特質の一つである。此の意味から言へば高等なる動物ほど音聲に對して聞き分け感じ分ける程度が深いと言ひ得られる。更に人間の内でも音聲に對してより深く感ずる程より高等なりとの斷案に到達はしないだらうか。無論野蕃人にも音樂はあるが、それは動物と等しく物のヒビキ位にしか感じないのだらう。雞がコケツコーや鶯のホーホケツキヨーよりは大分に進歩して居やうけれど、日本人が音聲を感じによつて「ネ」と「オト」に使ひ分けるまでには進んで居なからう。所で泰西諸國の音樂は「ネ」と「オト」との使ひ分けをする日本人の到底及ぶ所ではない。三千年の長い歴史をもつた我帝國の音樂は、ベートーフエンの最も拙劣なソナタの一行にも及ばぬと言ふ事であるが、すると我國人は泰西の國人よりも大分に劣等な人類だと言ひ得られる事になる。

日本人は戰爭に強い。戰爭は殺し會ふのだから野蕃な事の一つである。戰爭は野蕃人にだつてある。野蕃人ほど戰爭が多い。それは戰爭は野蕃な事であるからだ。日本人が戰爭に強いと言ふ事は野蕃人に近い證據だ。戰爭に強いと言ふ樣な事は文明人の特質でもなければ誇りでもない。三千年の長い歴史は我國民が野蕃未開である證據とはなつても、文明國民である證據には少しもならないのである。外國には紫色や赤色の音を聞く事の出來る人があり、A音やE音の色を見る事が出來る人が澤山あるのだ。此の事は別述したから此處には略するが、オルガンはどんな色の音を出すか、ピアノの音は何色だとか言へば日本人は狂人だと言ふかも知れない。バイオリンの音はどんな香がするとか、マンドリンの音はどんな味があるとか。野蕃人の日本人よ、田紳の日本人よ。お前達はそんなセンチメンタルな事がわかるものか。戰爭に勝つ日本人よ、殺し會ひに強い日本人よ。音を見たり色を聞いたりする樣な事は、お前達には

痴人の夢物語とおもふだらうよ。

第二　音の色と色の音

此の吾々の住む地球が文明の零圍氣に強く深く抱擁せられればせられる程人の心はおいおいと尖つて來る。そして二千年三千年の昔にはなかつたらうと思はれる神經衰弱と言ふ樣な病氣が出來て來る。我々の神經が尖つて來れば來る程文明が細かく深く、微を穿つて來て已まないと言ふ風になつて來る。日本の田舍紳士がバリ！やロンドンなどへゆくとすぐ神經衰弱にかゝる。細かい事を感ずるのが現代の文明人である。大都の學生などがすぐ神經衰弱にかゝる。之は雜沓する大都市のまなかへ田舍からぶらりとやつて來てその繁華なのにおつたまげる。五角であつた神經が四角となり三角となつておいおいと尖つて來る。そこで神經の強い人はよいが、弱い人はすぐ神經衰弱にかゝつてしまふ。神經の強い人でも少しは幾分か神經衰弱にかゝる。實に現代の人は總て神經衰弱症にかゝつて居る患者である。文明はおいおい人の心を尖らし、人を神經衰弱にしてゆく。太古の人々の心は丸かつたのであらうが、文明が進むにつれて多角形に尖りが出來、それが十角となり九角となり五角となつて、遂には稜がおいおい少なくなると共に尖り方がするどくなり、四角形三角形にまでならうとして居る。文明は實に人の心を三角形にするものである。

如斯現代人の心は次第に稜が鋭くなつて來ると同時に感じの細かなものを好む樣になつて來る。そして四角の人よりも三角の人の方がより細かく感じる事になる。昔の人の氣がつかない樣な事まで氣がつく。昔の人にしてみればそんな馬鹿な事がとおもふ樣な事まで感じるのである。野蕃人や太古の音樂は頗る悠長なものであつた。音樂のみならず文學藝術皆然りであり、東洋のみならず西洋諸國の太古を見ても左樣である。例へば太古野蕃人や未開の人々の音樂はそれが樂器であると歌であるとを論せず至つて大まかなものであつた。樂器なども唯ポンと打てばポンと音がする一音だけで

あつた。鉦はおそらく何れの國を問はず最も原始的な樂器であり、その遺物なのだらうとおもはれる。ポンと打つてポンと一音のみを出すと言ふ事は樂器としては最も原始的のものである。打てば音を出すから打つのだ。それがおいおい進んで二つなり三つなりと一個の樂器で以て發音せしむる樣になり、トンチンカン、トンチリリンカン、となりトンチンチリリンカンポンとなつて追々と復雜になつて來る。又絃を二本三本四本と追々と引つぱり出して之を彈ずる事になると三絃の三味となり四絃のバイオリンとなり十三絃の琴となつて來て追々と復雜になつて來る。そして多絃琴であるハープやピアノなどまで進歩して來たのである。種々の音を出す事も、最初は音色の異つた例へば太鼓と鉦と拍子木とで囃したのを、次第に同じ音色で高低强弱をつけて來る樣になり、それがメロディーとなり名曲を作り出す事となつて來る。次にハーモニーがわかる樣になつて來るのである。此のハーモニーがわかる人種は餘程進んだ人種であり、それだけ現代人が昔の人よりも感じが强くなつて居るのである。現代のオーケストラは異なつた音色のものを集めて、その各々のハーモニーを自由に發揮させる處に大なる進歩があるとおもはれる。要すに現代の文明が進歩すればする程細かな所に氣がつき神經が尖つて來て遂にハーモニーの樣なものまでがわかり出し、そのハーモニーが益々進歩して、ハーモニーのない樣な曲は音樂として價値がない程にまでなつてきたのである。如斯現代人は細かなそして刺戟の强い尖つたものを好む事となり古の人の樣に大まかな事をして居ては氣がすまなくなつて來るのである。之が文明の最も大なる特質でありそれが文藝に影響する事も又甚しい。現代の文明は此の細かな心がなければ理解出來ないのである。豐臣秀吉が如何に英雄であつても此の世界へポカンとつれて來たらすぐ神經衰弱にかゝつてしまふのである。此の意味から言へば現代人は秀吉よりもエライのである。

現代人は尖つた刺戟の强いそして細かいものを好む樣になり理解する樣になつて來た。それは何れの方面にも影響して居る。酒でも現代人は强いのを好む樣になりウイ

スキーの様な强烈な酒が澤山に飲まれる様になる。婦人の着物でも色彩の强い鮮明なものが好まれ地味なものは追々と捨てられてゆくのである。建築でもセセッションの様に直線式の强い感じを持つたものが好まれる様になつて來る。

如斯現代人の神經は頗る過敏であり細かいのである。だから音を見たり色を聞いたりする様になつて來る。佛蘭西の頽廢派 (decadence) の象徵的詩人 (symbolist) アルテユール・ランボー (Arthur Rainbaud) の母音 (Voyelles) と言ふ有名なる小曲(Sonnet)中の冒頭に次の如き詩がある。

A, noir. E, blanc. I, rouge. U, vert. O, bleu. voyelles.
Je dirai quelque jour vos naissance latentes;

と言ふのである。卽ち、

母音よ、Aは黑、Eは白、Iは赤、Uは綠、Oは靑、
いつかは汝が潛める出生を歌はん我は。

心理で言ふ色彩聽覺 (Synesthesia)であり The correspondence of sounds and ideas. を歌つたものである。

ランボーの母音の詩はいつも色彩聽覺、二重感能の引例として各方面に引用される有名なるソンネットである。新藝術の上に官能交錯の現象が起つた事よりして象徵詩人の詩歌と音樂との接近になつた。所謂音樂的繪畫や繪畫的音樂 Klangmalerei の現象はヴエルレーヌやボードレールなどのシンボリストの作品によく發揮せられた。彼等は音樂の繪畫を作らうとした。繪畫の音樂を作らうとした。換言すれば音を畫き、色を聞くのである。文字的の表現を以て音樂や繪畫と同じ效果を收めやうとするものである。ボートレールやヴエルレーヌに於ては Klangmalerei の技巧を其の極點にまで運ばうとしたものであり、ランボーの母音の詩の如きは其の極度に達したものである。如斯新藝術の上に於て音樂、繪畫、詩、彫刻等が混入し混亂した事は近代文藝の特色であるとしなければならない。佛のゴーチエは之を稱して「藝術の轉換」Tramsp

osition of artと言ふて居る。

現代人の感能は此の二重感能（Synesthesia）を今やまさに突破して混感にまでも到達しやうとして居るのである。或る感覺が他の第二次的の――又は第三次的の――感覺を呼び起すのである。

シモンズは「象徴主義運動」と云ふ著述の中で「ヴエルレーヌは聽覺と視覺とが殆んど全く流通して居た」と言つて居る。佛蘭西の近代詩人はランボーのみならずヴエルレーヌやボードレールなどは殆んど其の作が混感的色彩を有して居る事は彼等の作を讀んで見ればよくわかるとおもふ。同じ佛蘭西の小說家ヒユイスマンズは「ア、レブール」といふ小說の中で「味の音樂」「香の畫堂」を作らうとした。之について故上田敏博士は次の如く述べられた。

先年死んだヒユイスマンズ Huysmans は千八百八十九年 'A Rebours'「逆に」と言ふ小說の中に突飛な普通の考と違つた事を書きました。夫に據りますと、本の中の主人公は或る家を拵へてそこに晝夜籠つて居つて音樂を聽いたり繪を見たりする。併し普通の音樂では面白くない。普通の繪では興が薄い、何か變つた音樂を聞き何か變つた繪畫を見ようと言ふので段々考へた末味の音樂香ひの畫堂を作らうとした。此の味の音樂と言ふのはオルガンかピアノの樣なものがあつて、其のオルガンのストップの上に一々酒を注いで置くのである。さうして一つ引き出して酒が一滴落ちます。夫を味つて見て、夫から又他のストップを引き出して味を味はふ。詰りそれが音樂になつて居る。何故かと言ふにキユラソと言ふ酒は甘酸つぱい上にひりひりと滑かな處がある。だからそれを樂器にするとクラリネットの味がする。夫からキユンメルブランドワインはツンと鼻の方に強く來る。夫故に之はオーボーの味がする。此の二つを一緒に味はふんだから一つの立派な音樂が出來る。夫からジンはコルネット、ウイスキーはトロンボンと言ふ風になつて居る。夫で立派な合奏が出來る。所謂味の合奏であります。次にもう一つ香の畫堂と言ふのは例へば瓶に色

々な香を入れて置いて、夫を嗅いで心の裡に色々な繪をかくのであります。例へば春の野に女が逍遙して居る樣な畫をかかうとすれば之を本當の繪でかくのは面倒である。乃ち春草の香ひのある香水、夫からホワイトローズを嗅いで次に麝香を嗅ぐ。さうすると野と花と美人、詰り立派な美人逍遙の圖が出來てしまふ。(現代の藝術)

スウインバアンの詩には「音樂の如く聞える光」とか「黃金色の歌の調べの甘き密」とか「響の香」「色の諧調」と言つた樣な所があり、其他種々の面白い混感がある。又バナヽの聲、苺色の人名、雞の卵色の聲などは一寸面白いが、バイオリンの音は菫色、琴の音は白色と見えるのである相だ。尙又音樂を聞いて壁畫が見えたり薄荷の味が暗綠色に見えたりする人もあると言ふ。

大正九年十二月十二日の讀賣新聞で久保田靜雄と言ふ人がスクリアビンとリミントンの二人のカラーコードを擧げて居られるのを拜見した。それによるとスクリアビンの方は、

Cは赤、C#は菫、Dは黃、D#は鋼の光輝、Eは眞珠色の青及月光色、Fは暗色、F#は明青、Gは薔薇色を加味した橙、G#は紫、Aは綠、A#は鋼の光輝、Bは眞珠青色及月光色、

となつて居る。リミントンの方は、

Cは深赤、C#はクリムソン、Dは橙紅、D#は橙、Eは黃、Fは黃綠、Gは稍青味を帶びた綠、G#は青綠、Aは藍、A#は深青、Bは菫、

となつて居る。

久保田氏の論文は心理研究百九號石川義一氏の「音と色との一致點」と言ふ論文に對しての反對說を述べられたものである。石川氏の此の論文は同誌を見られた方は御承知の事だらうと思はれる。尙又「朝鮮教育」とか言ふ朝鮮京城出版の教育雜誌にも大正十年度に石川氏自ら登載されたものがあつた樣におもふ。何れも教育的に乃至は

學術的に有難い研究論文であつたとおもふ。

近代文明の刺戟は追々と人の心を尖らせてくる。五角が四角になり遂に三角になる。追々と細かく深くなつて來る。益々神經過敏になつて來る。そこで色を聞いたり音を見たり色を味つたりする樣になつて來る。そこで學理的に研究しやうとして種々の問題を引き起す。米國ウイオミング大學教授哲學博士ドーニー孃は此の事について の大研究家であると言ふ事である。石川義一氏の心理研究及び朝鮮教育所載の論文は科學的に音と色との一致を主張したものであり、久保田靜雄氏の讀賣新聞の所載論文は石川氏の研究に反對して科學的一致の不可能な事を論じ、要するに一致は只各人の感能に依るものであつて、絶對的に光波と音波とは同樣一致すべきものでない事を立證して居る。

先づ最初に石川氏の論文(「心理研究」第百九號及「朝鮮教育」大正十年)はどうであるか。石川氏によれば氏は先づアメリカインディアンの音色の研究に出發し、作曲歌スクリアビンの音と色との研究を述べて本論に入つて居られる。アメリカインディアンは昔から音を呼ぶに色の名で呼んで居た。それは如何なる理由かは不明であるが、何はともあれ各音を各色に一々當てはめて居る事は事實であると言ふ。卽ち、

Aは藍、Cは黃、Dは橙黃、Eは綠、Fは赤、といふ五音階から成り立つと言ふ。

次に露國の作曲歌スクリアビンは繪畫の如き音樂を作らうと苦心した。彼の晩年の作は何處か色に似て居るが如き情緒を我々に持たしめる。其の最も著しいのはプロメセウス及びプレリデヲであると。

石川氏は此處より氏の本論であるべき音と色との感じを數字で以て現はす研究に入つて次の如く述べて居られる。

音の波動は各音に依て異なつて居るが、我々人間が感じ得る音は一秒間に二十乃至四千までの波動數に限られて居る。(中略)光は一秒間に三百九十五兆乃至七百五十七兆の波動を有する光に限つて我々の感覺に入る。音波は空氣の波動である横波で

ある。光波はエーテルの波動で堅波である。然しながら横波である音波に非常な速度を加ふれば音波の頂點と頂點との間は接近して來る。而して如何程迄でにでも二頂點を接近し得る。斯の如く接近した時の波動の一點は光波の波動の一點と等しくなる。卽ち音波の振動數を極度まで增加すると光波の波動の形になる。然るにピアノ又はオルガンの中間にあるCの音は一秒間に二百五十六回の振動數を有して居る。又物理學上の實驗に依れば一音が一オクターブ高くなると其の振動數が元の二倍になる。卽ち一音階高い所では二倍の五百十二回の振動數となる。二音階高くなると其の振動數は $256 \times 2^2 = 1024$ となる。如斯計算して幾回か繼續して行くと必らず或る光の波動數と接近して來る。其の近似數をば色の我々の感覺に入り得る間の光波の振動數にする。卽ち 256 に 2 の幾乘かを乘じた數が 395兆 乃至は 757兆 にする樣に n を定める。尤も我々には一秒四千回の波動以上は聞えぬのであるから、ピアノ中間のCより次第に右の一音階づゝ進めてゆくと第五音階の時は $256 \times 2^4 = 4096$ 卽ち一秒間四千九十六回の振動數となる。

我々は前の計算を幾回となく連續してゆく途中に於て光波の何れかの波動數との近似點を見出したいのである。數學的歸納法に依り一般に n 音階の C 音波數は $256 \times 2^{n-1}$ となる。我々は n を如何樣にも大きくする事が出來る。故に我々は光波數の吾人の感じ得る範圍內に入るまで n を增大する事が出來る。卽ち換言すれば我々は C の第何音階の音波數と或る色の光波數とを出來得る限り接近さす事を得る。然るに前述の如く我々の視覺に入るのは一秒間に三百九十五兆乃至は七百五十七兆の光波數に限られて居る事故 $256 \times 2^{n-1}$ を右の間の或る數との近似數に求むれば、此の問題は容易に解決が出來ると思はれる。卽ち第何音階Cの音波數と何色の光波數とが近似するかを見れば第四十一音階か或は第四十二音階のCの音波數は我々の視覺に入り得る範圍內の色の波動數と近似する。卽ち以上の方法に於て計算の結果を表示すれば

	（音名）	（波動數）	（波動數）	（色名）
第四十一音階	C	五六二兆	五六六兆	綠
	D	六五三兆	六六六兆	藍
	E	七五〇兆	七五七兆	紫
	F	三〇七兆	三九五兆	赤
第四十音階	G	四四五兆	四三三兆	深紅
	A	四九一兆	五〇〇兆	橙
	B	五三八兆	五三三兆	綠

音と色とが如斯一致して居るものとすればそれから多數の有益な結果が生れて來るとおもふ。尙又音樂界は勿論の事、實驗心理學者並に畫家に取つても實に有益だとおもふ云々。（心理研究より要點抄錄）

右は石川氏の研究論文の極要點だけを抄記したものである。石川氏の同論文は頗る詳細に說明されたものである。詳細を知り度い方は心理研究を御覽になればよくわかるとおもふ。要するに氏は波動數の近似點を發見して（光波と音波の）光と音との一致を見出さうと努力されたものである。そしてそれが波動數に於て大體の一致點を發見し石川式カラーコードとも言ふべき右の表に到達されたものである。右の論文は近年一寸色毛の變つた研究であるが、右につき久保田靜雄氏は大正九年十二月十二日の讀賣新聞にて色と音との不一致を主張し、石川氏の說に反對されたのである。

久保田氏も說かるゝ如く石川氏の主張には一つの難點がある。由來光波はエーテルと言ふ假定的の振動であり、音波は振動を傳へるメディウムが物質である。卽ちメディウムの全然違つたものを傳はる波動が何處かで一致すると考へる事は出來ない。久保田靜雄氏は言ふ。

兎に角同じ色でも音樂的の性質が人に依て異なるのは何を意味するでせう。若し科學的に音と色との一致點が完全に證明さるゝならばそれが普遍的の性質をもつて誰

のカラーコードも一致しなければなりますまい。(中略)メディウムの違つて居る事は即ち速度が違つて居る事でありますから振動數を一致させたからと言つて波は一致しませぬ。又壓力の抵抗によつて生ずる縱波が形の變化(シーヤ)に對する抵抗のみに依て生ずる横波になり得る事は不可解であります。又感覺の上から言つても音の方が分解的であるのに對して光の方は綜合的であります。即ち種々の音を一所に聞いても吾々は之を分けて感ずる事が出來るけれども、違つた色の光が同時に或る物體を照らすのを見た時視覺に映ずるものは只その合成した色であつて之を分解して見る事は不可能である。以上の事だけでも音を色に翻譯する事は無理だとわかるだらうとおもふ。即ち此の理由に依て石川氏の論據をなす原則は不成立である。(讀賣新聞より抄錄)

久保田氏は尙音と色との一致はたゞ感じによるのみである事を主張し、次の結言を附加せられて居る。

色と音とは以上の如く物理學上の不一致點があり感覺上の類似點も未だ確定されないのであるにもかゝはらず、私の色彩音樂(適譯ではないが Color Music 或は Mobile Color と稱して居るものゝ事です)の研究が無意味でない事が思はれます。何故とならば色彩音樂は音樂と獨立して別個の藝術として感情を表現する可能性を持つて居るからであります。然し此の可能性が此の範圍にまで及ぶかは未解決の事であり、新藝術を開拓する興味ある問題であります。私は是れが少なくとも他の形式と結合されて混然ともり上つた藝術を構成し得る望みをもつて居ります。例へば演劇の形式に於て光が動的に感情を表示する或は音樂の雰圍氣中に躍動する玆に新しい綜合藝術の形式が生れるのではありますまいか。(讀賣新聞)

私は大體に於て久保田氏の說に贊成するものである。音が分解的性質であるに對して色は綜合的性質であると說かれる點は一寸首肯し難い樣に思ふが、色と音とか物理的に數學的計算を以てしても乃至は事實上の問題としても容易に一致しないと思ふ。

只音と色又は香や味は感じの上に於てのみ或る感覺を通じて一致點を發見する事が出來るのであり翻譯が出來るのであらう。若し物理的に乃至は科學的に確實に一致するものであればそれは時と處と人とを論ぜず普遍的に結果も一致すべき性質のものでなければならない。しかしそれは今の處不可能とおもはれる。尙又現在の科學の力では到底說明し難いのである。

要之、音を見たり色を聞いたり、乃至は音や色を味つたりすると言ふ事は感じである。物理學や數學や乃至は科學的の世界を脫して感情の世界の問題である。音樂や繪畫——總て藝術——の感じは科學的に計算で以て割り出す事が出來ないものである。計算以上のものであり科學以上のものである。此處に藝術の高貴な所がある。色は何處までも色であり視感覺であるから決して音ではない。又音は何處までも音であり聽感覺であるから色ではない。前者は目の働であり後者は耳の働である。耳は耳としての特種な仕事があり目は目としての特別な任務がある。しかしほがらかな春の野に散歩する時、眞に混りのない美に接する。此處に春の野が音樂的感興として吾人に感ぜられる。春の野は何處までも音樂ではないけれども、吾人の心は之を一個の堂々たる音樂として感じるのである。春の野は一個の音樂たるにちがひない。「美」に接した時は吾々の心はその相手が音樂であると繪畫であると乃至は美しい風景であるとを論ぜず、神の世界に遊ぶ事が出來る。此處に藝術と宗敎とは一致する。氣持のいゝ音樂の流れを聞く時、春の野は雙眼の內に浮ぶのである。音樂や藝術——一般に宗敎に於ても——之を計算すべき性質のものではない。「美」は物質的經驗以上のものであり、先驗的數學以上のものである。美は神であり宗敎である。赤い色を見た時の吾人のインテレストは或は愉快、戀愛、勇氣、熱情、勢力を感じて亢奮する。しかし「赤」はそれ自身愉快でも戀愛でも熱情でも勇氣でもない。しか感ずるのは吾々の心の作用である。そしてそれ等の感情は音樂としてのインテレストと同じものである時。そこに音と色との交響性が存在するのである。赤い色を見て春の野の長閑な風景のメロディー

が流れる樣に、又戰爭の如き亢奮的氣分になる樣に。

吾々が頗る冷やかな靜な、沈靜な音樂のメロディーを聞く時、平和な深遠な理智的な宗教的な――乃至は哲學的な――青い色を思ふ。思ふ心は音樂であると繪畫であるとの論なく、共に靜かな思ひが起るのである。

由來音と色とを客觀的對象によつて又は感受的機官によつて一致させようとする方法は誤つて居るのだと思ふ。例へばAの音は黑でIの音は赤だと言ふ風に。もとより感受的の機官は音は耳であり色は目であるから目で聞く事も耳で見る事も出來ないが、Aと言ふ客觀的の音と黑と言ふ客觀的の色とをすべて客觀的に一致させようとする事は不可能だとおもへる。只Aと言ふ音を聞いた時の吾人の內的感興と黑と言ふ色を見た時の吾人の內的感興とが、內的感興として同じである場合に內的感興として一致するのである。Aと黑とが一致するのでなく、吾人の心の作用として一致するのである。故にA音を聞いた時に黑色を見る事が出來E音を聞いた時に白色を見たと同等の感情を起すのである。此處に音と色との確然たる一致がある。

音と色とは右の如く或る音と或る色（又は或る香）が吾人に感情的亢奮を起す場合、共通なる感興を惹起したる場合に於てのみ吾人の內的精神的に一致すると考へられ、それが音と色のみならず吾人の感覺のすべては吾人の內的精神の亢奮によつて自由に一致するものである。だから人々の心心によりて各々之等の一致點を異にするのである。決して普遍的に科學的に共通なる一致點を發見する事は不可能な事であり徒勞な仕事である。只精神的內的感興が一致するのである。

吾人の感情はそんなに明確に科學的に分類したり區分したり出來るものではない。ヴントの三方向などは決して確實なものと言ひ得ない。三方向にあらず六方向にあらず快か快にあらず不快か不快にあらず文字や言葉を以て現はし得べからざる感情があるのであるから、そこに藝術や宗教の生命があるのである。若し吾人の感情が音や色の一致によつて確定される場合には藝術家の仕事はなくなる。換言すれば藝術家は感

情を作る者であるからである。種々な藝術品が、多くの藝術家が、各々異なつた感情を顯はし作るのである。此處に感情の泉は不朽であり、藝術の生命は永遠に高貴なのである。

由來音と色とは餘程近い感情を惹起するものである事は古くより認められて居た。そして又近代に至つては音の藝術や色の藝術を離れて「音と色との綜合藝術」と言ふものが一個の獨立的藝術として感情を表現し得る可能性を認めらるゝに至つた。しかしそんな藝術が果して如何なるものであるかを實際に示した人はない。又示さうと努力した人はあつても未だ完成に至つたと言ふ事はない。要するに音と色との綜合藝術は可能であるらしく可能でないらしく興味ある研究問題たるを失はないのである。

「音と色との綜合藝術」と言ふ獨立した一個の藝術としてゞなくとも、從來の色彩的藝術乃至はドラマ、オペレットなどは音の藝術より多大の援助を得て居た事は事實である。例へば活動寫眞に於て音樂隊の演奏はどんなに活動寫眞の光線に生ける力を與へたか。之たしかに音樂の援助である。ドラマ、オペレットにも音樂は是非必要なのである。例へば色彩、光線に頗る沈んだ感じを現はす時、之に加ふるに音樂の演奏によつてより沈んだ氣分を表現するの類である。しかし是れとても決して「音と色との綜合藝術」と言ふ單獨なる表現ではない。劇的情緒が音樂藝術によつてより完全により密接に表現されたまでゝはあるが、しかしかゝる色彩光線の劇の援助としての音樂は洋の東西を問はず古より必要缺くべからざるものであつたのである。

勿論「音と色との綜合藝術」に於ては音と色とがピッタリと合つたものでなければいけない。眞の意味に於ける綜合でなければいけない。音と色との藝術をはなれた眞の音色綜合一致の藝術であるべきものである。そしてそれは音にあらず色にあらず他の獨立の感情を表現すべき性質のものでなければいけない。スクリアビンの「色彩音樂」(Color Music) もかゝる企圖であつたのではあるまいかとおもふ。

一寸此處で說明を附加しかいと思ふ。それは此處で附加した方が都合がよいと思ふ

から音について今少し述べる事とする。今此處に附加記述しやうとするのは「純粹の音樂」と言ふ事である。そして普通音樂會などの聽衆が或る音樂を聽くと言ふ事は耳のみの働によつて觀賞するのでなく、目の働も大變にはたらいて居ると言ふ事と、普通音樂と稱するものゝ内には目の作用の大變に影響をもつて居ると言ふ事とである。此の意味に於ても音と色とは頗る重大なる關係があると言ふ事が知れるのである。

「純粹の音樂」(ABSOLUTE-MUSIC)とは何だか奇を衒ふ言葉の樣にもあるが、此の點は何人も殆んど氣附かずに只音樂とし言はゞ耳の働とのみ心得て居るのである。純粹に只耳のみの觀賞を以てする音樂はそれが純粹の音樂であるが普通は左樣でない。先づ音樂の性質を考へると音の高低强弱長短、つまりリズムとメロディーから成立し、それにハーモニーが加はつて吾人の聽覺に刺戟を與へる――吾人の觀賞に價する――藝術であると考へられる。すると音樂とは只耳の働のみと考へる事が出來るのであり純粹の音樂とは如斯ものであるかも知れない。しかし吾人が如何に音のみの刺戟を純粹に只單にそれをのみ受け入れやうとしても――感情にうつたへ又は觀賞しやうとしても――それは多くは不可能の事である。何等か音以外の或る何物かの刺戟が復雜に加はつて、純粹の音のみの觀賞は經驗上理論上不可能なのである。

例へば此處に一人の聲樂家があつて音樂會に「オ・ソレ・ミヲ」を歌つたとする。此の場合聽衆はその曲のメロディーを聞く事が出來るであらう。次に「はればれと太陽はかゞやき……」と歌詞を知り味ひ感ずる事が出來るであらう。又セレナードを歌つたとすれば、その曲のメロディーは聞く事が出來るし、「あはれゆかしき歌の調べ……」と言ふ歌詞を聞き味ひ感ずる事が出來やう。伴奏にともなつてピアノの音が流れるのを聞くのである。却說此の場合に果して聽衆の觀賞の對家は「音」のみに限られて居るのであらうか。眞に純粹の音樂のみを觀賞したのだらうか。淋しいとか靜かなとか面白いとかかなしいとかの感じは只此の音のメロディーによつてのみ感じたのだらうか。若し此の場合にメロディーによつてのみ觀賞する事が出來たとすればそれは純粹の音

樂であるが、歌詞と言ふもつは音樂とちがふ。歌詞は文學である。「あはれゆかしき歌の調べ……」と歌ふ時吾人の心は歌の情調を感ずるのである。之はメロディーによつて感じたのではなく歌詞と言ふ文學によつて感じたのである。「あはれゆかしき歌の調べ……」と言ふ歌詞が引き起す情緒はメロディーが引き起した情緒とは別であるべき筈だから、只單に音樂によつてのみの觀賞と見る事は出來ない。聽衆はメロディーを感ずると同時に歌詞を感じて居る。前者は音樂を感じたのであり後者は文學的の情緒を引き起したのである。尙出演者のアクションを目で見るのである。例へば身振動作の如きものである。尙又出演者の衣裳とか光線とか舞臺とか裝飾とか、つまり會場のアトモスフエーアが大變に關係する。又ステージの氣分なんかも聽衆に或る一種の感じをもたせる事となる。此の出演者のアクション、會場のアトモスフエーア、ステージの氣分、この樣なものから受ける聽衆の感情は、純粹の音樂のメロディーから引き起した感情に加はる事が大變に多いから、或る聲樂家の獨唱を聞いた場合に只音樂をのみ純粹に觀賞したと言ふ事は出來ないし、之等メロディー以外のものは多くは耳より入るものでなくて目より入るものなのである。すると或る獨唱を觀賞したと言ふ事は音樂を純粹に觀賞したのではなくて視覺等による情緒が加はつて居るのであり、要するに耳のみの働ではなくて、目と耳との共同事業である。

此の場合に目を閉ぢて聞けばどうか？　目を閉ぢて聞く場合には直ちに直接目を刺戟する事はないから視覺より入る感じはないと考へられるであらうけれど決して左樣ではない。視覺的の感覺はないと假定しても歌詞そのものは音樂ではない。「あはれゆかしき歌の調べ……」と言ふセレナードの歌詞は文學であり詩である。だから假令視覺的の感覺が絕對にないと假定しても、歌詞と言ふものの淋しいとか悲しいとかうれしいとか面白いとかの文學的の情緒が働く事になる。尙又目を閉ぢて居るから視感覺は絕對にないとは考へられない。例へばそれを聞く場合にその聲は人間の聲だとか犬の聲だとかの區別はわかるだらう。次に人間の內の女の聲か男の聲か子供の聲か大人

の聲か位はたれしもわかるであらう。つまり人間とか犬とか馬とか、又は男とか女とか子供とか大人とかと言ふ認識は過去の經驗に依つて直ちに形として色として――物體として――假令目は閉ぢて居ても認識する事が出來るし、又しないではおかれないのである。又目を閉ぢて居ても大體會場やステージの有樣は想像するのであり、要するに視感覺は目を閉ぢて居ても矢張關係して來るのであるから、目を閉ぢたからとてそれで純粹音樂を聽取した事とはなり得ない、特に女ならでは夜のあけぬ國とかで美人であればよいと言ふのが我國の風習だから、女聲獨唱でも美人であればないよりもよりねうちがありとするのである。之も視感覺が聽感覺に影響するよい例である。何とか言ふ華族の姫君が十年の夫との別居生活で淋しい思ひを歌で詠むと直ちにもてはやす、歌がよいのではなく華族と言ふ事とそれが至つて美人だと言ふ事がもてはやされる最大な要素をなして居る。九州の女王とか何とかが詩を作つたり歌を詠んだりすると直ちに大もてとなつてそんなくだらぬ詩集が飛んで賣れてゆく。歌や詩よりも本人が美人――それも人並はづれた美人である――と言ふ事に於てその藝術品があまり價値もなきものがもてはやされてゆくのである。

一寸話は横道に入りかけたから又本にもどる。却說然らばピアノやオルガン其他の樂器のみの演出はどうであるか。又はオーゲストラの樣なものゝ觀賞はどうか。之も要するに人聲の獨唱と理論上變りはないのである。例へばピアノソロを聞くとする。假令目を閉ぢて居てもピアノの音だと言ふ認識をするから、その「ピアノ」と言ふ認識それ自身は色彩感覺である。ピアノだと思ふ事はピアノと言ふ形式的な物體をみとめた事になる。又ピアノの音色はオルガンやバイオリンとは異なつて居るから直ちにピアノだとわかる。此の際に於ても矢張り周圍の雰圍氣や演奏者のアクションなどは假令目を閉ぢて居てもわかるのである。

要之ボーカルでは音樂と文學との共同情緒であり、樂器の演出は音樂のみの單獨なる情緒である樣におもへるけれども、決して吾人の感覺はそんな單調なものではない

から、純粋の音樂をと思つてもそれは不可能な事なのである。果して然らば耳に依る單獨なる音樂的感覺は絶對に不可能と言ひ得られる事となり、純粋音樂と吾人の思惟する場合も決して音樂のみの感覺ではなく目より入る色彩形象形態を感ずる事となるのである。

柳澤健氏が大阪朝日新聞の十年十二月二十五日に「サン・サーンスの死と瀕死の白鳥（ニュー）」と言ふ表題にて先日死を傳へられたサン・サーンスと近く我國へ來朝する舞踊家アンナ・パヴローヴァとの事を書いて居られるのを拜見した。「瀕死の白鳥」はサン・サーンスが此の世に殘した偉大なる樂章であり、それを最も好妙に演出するのはアンナ・パヴローヴァだ相であるが、その氏の論說の一節に此の「瀕死の白鳥」の舞臺面を次の如く書いて居る。

幕が靜かにあがる。蒼白い光が煙のやうに舞臺を一面に罩めて居る。爽がなヴィオロンセロの響が靜に起る。……と見ると眞白な羽毛につゝまれた白鳥が蒼白い光の中を夢のように泛んで居る。パヴローヴァである。——水の上の白鳥の姿そのまゝに——と言ふよりも白鳥の靈そのまゝの姿をとつて仄なる蒼白き光の中を動きはじめる。萬を超えて居る聽衆は咳一つする者もなく息を潛めて凝視て居る。この時トロキャデロの大ホールは恰も無人の境と化し去つた、唯彼方に白鳥一羽緩やかに音樂のなかを動くあるのみである。莊嚴と言ふべきか嚴肅と言ふべきか、この陶醉（エクスタス）の瞬間を名づくるにふさはしい言葉を今以て見出すことが能きない氣がする。——死に瀕した白鳥は次第に息細つてしまつて終には柔かなその羽毛を微に震はせたまゝ煙の消えゆくが如く微けく息斷えてしまふ。音樂も最後の顫音（トリル）を震はしてそのまゝ細々と消えてゆく……

私は此の新聞記事を讀みながら之だと思つた。音と色との一致、それはかゝる天才の殘した樂章の施律の流れに名踊手アンナ・パヴローヴァが妙技を振ふた時、その樣な場合には音とも色とも言ひ得ないエクスタスに浸る時たしかに一致したものとおもは

れる。

此の柳澤氏の記事を以て正しとするならば、眞を傳へて居るとするならば――私は見た事はないが、又近く來朝する機會を得て早速見ようと思ふけれども――之こそたしかに音と色との一致――感じの上での――であると思ふ。それにしてもサン・サーンスの死は樂界の大なるかなしみである。

却說如斯假令專問的の音樂などと言ふも決して單獨なる聽覺のみによる感覺ではなく又かゝる純粹音樂なるものは吾人の經驗上觀賞不可能な事であるし、假令ピアノのソロだとてもその曲そのまゝが吾人の感覺の對象となるのではなく、他の幾多の情緒と相まちて吾人の觀賞に價する事となるのであるとして見れば、音と色とは決して引き離ち得る性質のものではなく、又絕對に引き離ゝ得ない事と考へなければならない。此處に理論上物理的に「音」と言ふ獨立の感覺はあつても、音樂上は必らず此處に「色」――物――と言ふ感じ――認識又は感覺――をぬきにする事は出來ないのである。此處に音樂上「色」をぬきにする事は出來ないとすれば、音樂はその要素の重大なるものとしての「色」を豫想しなければならない。

本節に於て最初に理論上物理學的に音と色とは同じものではないと言ふ事と、それを一致する如く考へるのは只感じのみである事とを述べた。そしてお互が吾人の實際生活上不可離の深い間柄である事を說明し、單獨に純粹音樂など言ふものは決して絕對的に感ずる事が出來ない。常に音と色とは相關係し共同して吾人の感情に影響するものであると結論したのである。此處に教育上重大なる意義があると思ふ。

抑教育の事業は其の殆んど大部分が目と耳とに依つてなさるゝものである。卽ち音と色との重大なる關係があるとしてみれば、教育上此の點を大に考察するを要する。唯に教育のみならず音樂會はもとより、其他一般の影畫劇やドラマに至るまで、音と色との調和配合はそれ等一般の生死を負ふべき重大なる注意を要するのであるから、音と色との配合調和は教育上のみならず是等演出物一般に對して重大なる意義ある事

であるから、將來はもとより現今に於ても大に研究する必要がある。

第四章　耳の開鑿

第一　樂人の舟

小鹿なく此の山里とや詠じけむ、嵯峨野わたりの秋の頃はむかしを今にあはれである。禪正大殉仲國が、御寮の御馬に鞭あげてさまよひたりける琴聞橋のわたり、大堰川の水は小督をのみて此處に七百年、局が調べたりて心想夫戀の爪音はきこえねど、星うつり月たちても清き流れは盡くるの時なく、三船のふねもやひは事ふりて、龍頭鷁首の舟人が嵐溪に影ひたす嶺上の松の調にきそひたる詩歌管弦のむかしを思ふだにあはれである。

嵐溪は人も知る如く角倉了以翁によつて舟航する事の出來る樣になつた天下の奇勝であり、比類なき急流である。或は大堰川の名によりて歌はれ保津川の名によりて詠

まれ、嵐山の名によりて天下に知られた京都洛西の名勝である。「筏さしさんにあげたいものは、赤い襷や胸前垂や、心こめたる火打入れ。」ひなびた田舎の小女にも此の急端を下す筏さしの勇壯が戀の的となつて、仙洞御用の木材が鬼もすむてふ丹波の山中から筏に組み立てられて平安の都に運ばれる嵐溪の筏下りが、如何に田舎小女の心をそゝり立てた事であつたらう。

嵐溪の急端は人も知る、一竿を誤らば客も舟人も生命はないのである。長い間に上りては下り下りては上る舟人がさす竿の位置はチャンと定まつて居る。大きな岩には自然に大きな穴があいて居る。舟を引き上げる繩が岩の上をすべるから、岩は鏡の如く光つて居る。「軒より落つる雨だれの、絶えず休まず打つ時は、岩にも穴をうがつなり。」の小學生の歌ふ歌は嵐溪へ行つてはじめて觀察する事が出來る。しかし昔から此の急流を舟下したもので溺死したのは一度もない。只一回きりである。自ら身をなげた小督は澤山あるが、舟が覆つて溺死した者は空前絶後の唯一回きりである。嵐溪の歴史あつて以來唯一である。

此の唯一の溺死者は驚くなかれ海軍の軍樂隊であつた。今から三十餘年も事ふりにし昔、此の舟人のなれ切つた舟もやいに、時も時、運も運、何故に樂人の舟は覆つたのだらうか？　私は此處に重大なる教訓を得た事をよろこぶと共に、嵐溪の深谷に水泡と碎け散つた樂人を思ふ者である。

今から三十餘年も昔、私の未だ生れて居らなかつた前の事であるから、幼けき昔がたりに老いたる母の物語を聞き及ぶにすぎないが、此の物語が今更ながら私の此の小著の引例にやくだつ事となつたのも何たる因果であらう。私は重大なる教育的の教訓を得た事をよろこぶ者である。道は近きにあり。むづかしい學理よりも近い所に澤山の教育資料が殘されてある事を覺らなければならない。

ギリシヤ神話を讀んだ人であれば思ひ出す事だらう、ユリッシーズがサイリーンズの危險を航して海峽を通る傳說がある。又オルフイウスがライアを以て萬物を已に從

はすと言ふ神話がある。私は保津川に溺死した樂人を思ひ出す時、直ちにギリシャ神話の樂人を聯想する者である。私の物語りは今少し話さないとわからない。

オルフイウス一度びライアを手にすれば、蛛蜘は機を停めて巣に留まり、蜂は勞作を止めて傾聽し樹々の枝さへ自らそなたに靡いた。その長ずるに及びては益々その妙を極め、ライアを抱いて散歩すれば森の中なるありとあらゆる禽獸蟲けらまで其の後に隨ふ。嵐溪保津川の舟中で奏でた樂人の妙音は神もまよふかと思はれた。舟人が醉つたのも無理はない。オルフイウスのライアは木々の枝さへそなたに靡いたのである。蛛蜘や蜂までが勞作を止めて謹聽したのである。嵐溪舟中の樂人が妙なるしらべは舟人の醉ふ所となつた。今に地方の人々にその悲慘な最後が言ひ傳へられ物語られて居るのである。

ユリッシーズはトロイ陷ちて後、その部下を率い船を調べてイサカへ向つて出發する事になつた。海中サイリーンと呼ぶ三人のニムフの住つて居る一島がある。危險中最も危險な航路である。サイリーンは極めて唱歌が上手である。航行中其の歌を聞くと心いつしか恍惚として我を忘れ、海中に飛び込んでしまふ。ニムフは直ちに捕へて食つてしまふ。昔から此の航路を通つたもので無事に歸つたものはなかつた。ユリッシーズもよく此の航路の危險な事を知つて居つた。ユリッシーズは先づ部下の耳に蠟を詰めさせた。そして自分はニムフの歌の一番よく聞える帆檣の高い所に繩もて縛してもらつた。「己れが跪けば跪く程早く航過せよ。」と命じた。やがて舟はサイリーンズが小島のほとりに出た。波は平に碧樹の色を浮べた。吹き來る風も冷やかに面を撫づると見れば、水を渡つて何所からともなく歌唱の聲が聞えて來た。船の行くに從つて歌は次第に近づいて來る。其の聲は哀々として心緒をほぐすが樣である。或は切々として客情を訴ふるが樣である。堪えむとするに堪えられず抗せむとして抗し得ず、ユリッシーズは堪えかねて身を悶へ、只海中に飛び込まんとするが、身は固々帆檣に縛されて居るが爲に如何ともする事が出來ない。舟人は耳に蠟されて居るからニムフの

妙なる音樂も聞えず。「跪けば跪く程早く航過せよ」のユリッシーズの嚴命を守つて只漕ぎに漕ぐばかりである。船は程なく此の沖を航過してニムフの歌次第に遠ざかりユリッシーズ漸く我に復り無事此の沖を航過してしまつたのである。

ハイネの名詩に歌はれたライン川の流れにローレライの岩が今も尙昔を物語つて居る。夕陽が岩頭を血の色に染めて、ラインの水が岩をひたして暗綠色に淀む頃、ローレライは好んで美しい歌を歌ふ。美し小女は岩頭に立ちて、黃金の櫛とり髮の亂れを梳きつゝ口吟ぶ歌の聲の、くすしき力には神もさまよふ。漕ぎゆく舟人は何時しか行方も知らず舵を絕え、舟打ちよせては渦に卷き込まれてしまふ。哀れ藻屑と沈みはてた人々は傳說に殘るフアルツグラーフ公子ルードウキヒのみではなかつた。しかしそれ以後女の呪の歌は絕えたけれ共、ローレライの岩は今尙巍然としてラインの右岸に巨人の樣な姿をとゞめ、航行の人々に話し合はれ語り傳へられて居る。

私は嵐峽に溺死した樂人を思ふ時、ギリシャ神話の樂人を思ひ出す者である。一大城廓をかまへて社會と隔離し、耳に蠟して教育する現今の初等中等教育は、ユリッシーズの愚を學んで社會を無意味に航過せしめんとするものである。ユリッシーズは心の中でニムフの歌に聞き惚れて身命をすてゝ海中に投ぜんとはしたが、身は帆檣に縛されて如何ともする事能はず、一般社會の音曲は生徒の耳底に共鳴し、身以て之に投ぜんとはするが、校規や校訓と言ふ帆檣に縛されて如何ともする事が出來ぬ。何々は禁ず何々は禁ずと、古い道德の規範攻擊を受けて身動きもならず。一度校門を辭して社會に入ると耳の蠟は取られ帆檣の縛は解かれ、猫の皮にて張りたる琴に代る三味のライアを持ちたるニムフは、遠く古きギリシャの昔に求むる迄もなく、我國の至る所に跋扈して青少年を誘惑しつゝあるではないか。無味乾燥死灰の如き現代教育の道德的規範攻擊を受けつゝありし青少年の血汐みなぎる自由意志は此の四面楚歌の城廓をのがれてニムフの境地を慕ひ遂にサイリーンの捕虜となるのである。死灰の教科書は捨てられて小說之に代り、學校唱歌はすてられて遊里の俗曲に代るのである。何故で

あるか。俗曲の方が學校唱歌よりも人間味があるからである。死灰の教科書よりも小說の方がはるかに價値があるからである。

教育はいつも被教育者を引きつけなければならない。然るに被教育者は教育に引きつけられるより他の方へ引きつけられてゆく。オルフイウスのライアは森の中なるありとあらゆる蟲けらまでも引きつけたのである。嵐峽の樂人は舟人をして心恍惚たらしめたのである。音樂は人の心を引きつけるのである。人の心のみならず禽獸蟲けらまでも引きつけるのである。音樂の力は實に偉大なものである。

現今の教育は人の子を社會から引きはなさうとする。社會と隔離し耳や目に蠟して教育する。此處に實社會と矛盾する。第一子供を子供の世界から引き離さうとする。少しも共鳴しない文部省の唱歌を教へて童謠を排斥する。子供の無邪氣な心を大人の不純な心で以て惡くする。現在の教育者は子供を子供として教育しないで惡い大人として教育する。殊に現在の女子教育を見よ。男と散歩する事すら出來ない。兄と散歩する事すら出來ないのが現今の女子教育である。戀も出來ないのが現今の女子教育である。新しい思想が我身邊におしよせて來た時、それが美しい歌となり、きれいな詩となつて此處に新しき創造が生れるのである。我々が生を充足してゆくのには斷然因襲を蹴りとばし、よりより新しき世界へ進まなければならない。そこに社會の進化があり、新しき創造が生れる。所謂創造的進化である。我々が新しい生命を見出した時、社會の多くは依然として舊の狀態である。新しき思想も生命も總て彼等因襲的社會に生活するものゝ爲に防害せられるのである。社會の多くは新しき思想や生命を防害する惡人の集合所である。社會の多くは馬鹿者の集りである。

私の知つて居る多くの女學校では音樂會をひらくのに男子禁制である。只今書齊になげ込まれた新聞を見ると富山縣かどこかでは女生徒に三味を彈かせて大問題を起して居る。そんな事で何處に創造も進化もあるか。大學の先生達の奥樣には昔藝者をして居た人もあり、暗殺された原敬總理大臣の奥樣は昔何處かの藝者であつたと聞く。

東京の何處かでは女學校卒業生が藝者を志望したとかで市の社會課までうろたへて居る。原總理大臣が藝者を妻にしても何とも言はぬ官僚や三文記者も小學校教員が藝者を妻にしたらどんなに驚く事であらう。ことに女學校卒業生が藝者を志望して驚く樣な事で教育も何もあつたものか。

百科辭書の教育者よ。藝者を妻に出來ぬ教育者よ。至高至上なる戀もなし得ざる教育者よ。藝者を志望する事の出來ぬ女學生よ。兄とでも散歩する事の出來ぬ女學生よ。一度「樂人の舟」に乘つて廣い社會を見てくるがいゝ。おゝ「樂人の舟」よ。教育の眞理は總て此の舟につまれてある。

第二　耳なき國民

眼のない人間は物を見る事が出來ぬ。私の此處に言ふ眼のない人間も不思議や、金と女だけは見える。だから金をもうけると女を自動車に乘せて走る事もすれば、馬鹿に大きな別莊を作る事も知つて居る。所で實は見えない。自分が作つた別莊が上品か下品かがわからぬ。金さへ多く使へば立派だと思つて居る。如何なる繪畫があつても之等の人間には何等の價値もない。ルノアール何者ぞ、セザンヌ何者ぞ、ドガ何者ぞ、マイヨール何者ぞ、マチスやゴーギャンも之等の盲にかゝつては三文の價値もないのである。殊にピアズリーの强烈なる皮肉、美しき曲線美を味ふ事の出來ぬ人間が何處かの世界强國の一つにある相である。

其國では國民が又殆んど聾だと言ふ事だ。世界一のピアニストとして文明國民に喧傳さるゝパデレウスキーが如何に熱心に其の得意の名曲、ショパンのワルツや、ミニユエットを彈奏してくれても、世界一のボーカリスト、カルソーが熱烈なる音聲でリゴレットを歌つてくれても耳なき國民には猫に小判である。

其の國の人間は外國へも澤山に出て居る想であるし、矢張り男も女もあつて子も生めば、米と言ふものを常食として居るとの事である。所で外國へ出て行つて、皆が一

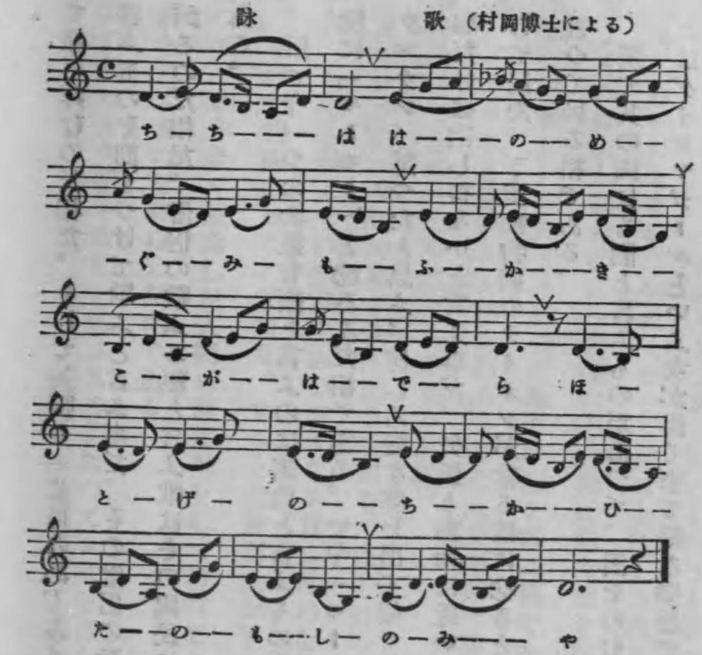
堂に會した時に、では一つ何か歌ふ事としやうと言つた處で、ナショナルソングと言ふものは一つもない。何人も知つて居る共通した歌と言ふものは無い。時々は蕃聲と言ふそれは犬か猫の樣に一種獨特の動物に似た聲を出して、意味も何もさつぱりと解らぬ、外國語に飜譯する事の出來ない歌を歌ふ相である。舞と言ふものを舞ふ相である。それが其の國のダンスと言ふものなんだ相だ。所で其の國民には殆んど共通した音樂ともつかぬものが二つあるとの事だ。

その一つは「父母のめぐみも深き紛川寺、ほとけのちかひたのもしのみや。」と言ふのだ。お寺と言ふものが澤山あつてカネと言ふものを打つとゴーンゴーンと音が出る。それが我國のピアノだ相だ。すると老若男女が手を合せて「ナムアミダブツ。」と言つて、木や金で製造した人間の樣な形をして居つてより大きなより恐ろしい顏をした佛と言ふものを拜むのだ相である。

其の國にも矢張り僧侶と言ふものが居つてカネを打つて「ナムアミダブツ」と言つて佛を拜むのだ相だ。そして矢張り「父母のめぐみも深き……。」と言つた風なお經と言ふものを節をつけて歌ふと言ふ事だ。その僧侶の歌ふ時には國民が何よりありがたがるのだ相だ。僧侶の歌ふお經と言ふ歌はその國民に最も共鳴する音樂だと言ふ事である。

所で今一つの共通音樂と言ふのは謠曲と言ふものだ。口を尖らして牛の樣に皆が一所に「モーモー」と唸るんだ相である。いや「モーモー」とはちがつた。「ウイウイ、ウンウン。」だつたと思ふ。何しろ變な聲を出す相である。全世界の何れの國民も此の聲だけは出し得ないと言ふ事だ。矢張り動物に近い加減であらうと聞いて來た人が話して居た。丁度動物園のライオンが唸る樣に唸るとの事だ。けれ共その國では歌ふと言つて居る相である、

所で其の國にも酒と言ふものがあつて、酒をのむと吾々の樣に醉ふ相である。其時にはゲイシャガールといふ女が出て來て變な樂器で以て「ペンペコペンペン。」と云ふ



音をさせて踊る相だ。此の「ペンペコペンペン。」と言ふ音を出す變な樂器は「シャミ」と言ふ名だ相である。「クサミ」とはちがふがよく似た名である。それは猫の皮で作つたものに長い柄をつきさし、別に三角形のバチと言ふものがあつて「ペンペコペコペンペン。」とやるんだ相だ。猫の皮で製造したものだから「ニャンニャコ、ニャンニャン。」と言ふ樣な音が出るかと思つて居たら違つた相である。

所で面白い事には此のシャミと言ふものはオルガンやピアノで以て伴奏する樣な風とはちがつて、先づゲイシャガールと言ふ女が「キャーッ、キャーッ。」と二三度叫ぶんだ。すると次に「ペンペコペンペン。」と來る。續いて醉つた男が變な動物的の聲をはり上げて「ヤッチョロマカセノ、ヨヤマカセ。」と呶鳴ると言ふ順序だ相である。ゲイシャガールも男と一所にドンドンとダンスをやる相である。すると蹴出しから眞紅のきれがヒラヒラ出て大變にきれいだと其の國民は言ふ相である。所で歌ふ所の歌は と言ふと。實は歌ふんでない相である。けれ共其の國では歌を歌ふと言つて居る相である。兎に角我々が聞くと叫んだり呶鳴つたりして居るとの事である。

× × × ×

讀者諸君、まことに千有餘年の長い歴史と、金甌無缺の國體とを維持し「總てにまさる史乘」なるものを振りかざす日本の國の音樂は、ベートーフエンの最も拙劣なるそなたの一頁の價値だに無いのである。世界强國の一なる我大日本帝國には、東京の

上野の一隅にさゝやかな音樂學校の建物が大都の風塵にさらされて僅に生命をつないで居るのである。其の僅か一つの音樂學校には一人のカルーソーも居らなければ一人のパデレウスキーも一人のチャイコフスキーも一人のブラームスも居ないのである。其所を卒業した多くの若き音樂家達が隨分澤山に全國に廣がつて居るのであるが、その人々の中にはハイドンやモツアルトのソナタすら彈奏し得ない人々が澤山にあるのだ。嗚呼、悲慘なる大日本帝國の音樂よ。

由來日本人は耳なき國民である。音樂なんかは殆んど理解し得ないのである。日本人は隨分澤山外國へ出て居るが、歐米人と一堂に會した樣な場合、「貴國のナショナルソングを。」と希望されても一人として歌ひ彈ずる者がない相である。ピアノを彈き得ない位ではない。合唱してよく合ふ樣な歌もなければ、たゞ音樂なんかは若いものどもの道樂の樣に考へて、外國人に聞かせて恥しうない樣な歌を唱ふ事は絶對に出來ない相である。歐米人は得意然と盛にコーラスをやる相である、其の時には日本人は

WAGNER CARICATURED
AS ATTACKING THE HUM-
AN AER.
BY ARTHUR ELSONS.

會堂の隅の方に小さくなつて居る相である。我國の政治家や商人の內に音樂に理解のある人が何人居るだらうか。西洋人が耳なき國民とするのも無理はない。

私はいつも思ふ。日本の藝術家はその多くが自己天狗だから困る。腕も力もないくせに一かど藝術家ぶるのである。我國に一人のベートーフェンがあるか。我國には悲しい事には音樂家と言ふものは殆んど一人も居らないと言つて良い。アーザー・エルソン氏のミュジカル・ナレッヂに、ワグナーが耳の穴を開鑿して居るポンチ畫がある。こんな偉大な音樂家でなくてもよいが、悲しい事には日本人は音樂について、一言半句も世界の舞臺へ立つ事が出來ぬのである。東京に一つしかない音樂學校と言ふ事も頗る心細い次第であるが、又その教授と言はるゝ人々に偉大なる藝術家は御氣の毒ながら一人も居ないのである。堂々教授と呼ばるる人々等が社會に發表するのは小學校の兒童の唱歌——それもあまり感心したやうなものは一つもないとして——や、中等學校の音樂の教科書位で、それも皆外國のメロディーを採つたものばかりであるのは何

とした悲慘な事であらう。我國には一人のソナタ作者もないのである。

私は日本で有名なと稱さるゝ人々が所謂自己天狗で音樂會に御出演になるから時々私も拜聽する次第であるが、それ等の人々が泰西名曲を演出する場合、その音樂家が眞にその曲の價値を自覺して居るかが疑はしい。唯その曲を五線紙の上に現れた通り誤りなく演出する位な事は、――音がちがはぬ位な事は――音樂學校の女子の教授達にも出來やうけれど、眞にその曲其ものゝ藝術的價値に立脚して、聽衆をして我を忘れしめ、引いて自己そのものも曲中の人物となつてしまふ處まで演出振を發輝する樣な人はないのである。

各地各所の音樂會などで私は隨分に澤山な日本の群小音樂家から泰西名曲を聞かされたものであるが、少しも氣分がのらない。メンデルスゾンにした處が、シューベルトにした處が、さてはリスト、チャイコフシキー、グリーク、ロンベルク、ヴエルディー等の作品――貴重なる音樂的寶玉――を、日本人の音樂家は曲りなりにも音だけは出す程のものである。日本人には其等の曲それ自身がすでに理解が出來ないのだ。殊に音樂學校の古い教授や婦人教授達の腕のまづさ加減はおそれ入らざるを得ないのである。世界の大舞臺に立つて耳の開鑿、音樂の改造をやるワグナーが、日本人のワグナーが一人でも居るか？

第三　耳の教育の不振

私は只今私の毎日の仕事の一つである新聞紙のスクラップ・ブックを整理して居た處、大正日々新聞の大正十年四月二十九日の夕刊に大變な事が載つて居た。今其の一節を抄記して見ると。

大阪府立中等學校長會議は二十八日午前一時より生野中學校に於て開催せられたるが、當日の協議中最も重要視せられつゝありし二部教授に關しては議論百出せる由にて其の結果は元來二部教授なるものは午前午後を通じて之を繼續的に行ふ事能は

ざる事情ありて、之を交叉的に行ふとせば夫に依て收容し能ふ能力は僅に二三割を出でず、豫想せるが如き其の結果收容力の培加せしむるが如きは到底望む能はず。收容力の增加は教室の增加、學級の增加、學校增設以外になかるべく、今日之以外に於ける根本的の方法を執らんとせば、日本の中等學校科目が外國のそれに比して多きに過ぎるものあり、此の際斷乎として「唱歌」「習字」を廢し、漢文は之を假名交り文として國語科に入れ、從來分科的に教授せられつゝありし博物學概要を教授し、地理歷史の時間を短縮して東洋史は之を廢し、之による教員の過剩は之を減じかくして教育費を減じて之を學校の增設に使用するの他なかるべし、云々。

私は此の記事を讀みつゝ驚かざるを得なかつた。教育費の節減もよい、學科の併合もよからうけれど、「此際斷乎として唱歌習字を廢し云々と」は如何なる事であるか。何故に唱歌が矢彈に上つたのか。澤山の學科の內唱歌と習字とが何故に考へにのぼるのだらうか。私は之は大問題であると思つた。漢文や毛筆習字や東洋史の廢止は私には大々的の意見はあるが、そんな意見は本書の目的とは別だから此處には述べない事とする。只唱歌科を斷乎として廢止すると言ふ事は教育の進步でなくて退步である。此の新聞の記事を以て正しとするならば、眞をおく事が出來るとするならば、以てその外の暴擧である。それが又實際教育者の口から出て居るとするならば益ゝ大變であると思ふ。原首相の暗殺や或る九州の女王の何とかと言ふ淫奔事件に新聞の社會部面の全部をおしげもなく使用して平氣で居る新聞記者が何故聲を大にして攻擊しないのか。原首相の暗殺は國家の不詳事たるにはちがひないが、原首相だけの日本とはちがふ。首相が暗殺されても日本の政治はびくともしない。少しは政黨と言ふ俗政治屋が動く位の事である。殊に九州の何とかと言ふ女王の淫奔事件が何になるか。現在のジャーナリストはモット大きな問題が澤山に見のこされてあるのに、一婦人の淫奔事件を全紙面に論ずるだけの力はあつても、かゝる大問題を一少部分に說明するだけの力しか持たない。私は此の當時の新聞を他の二三大新聞と稱するものについて調査して

見た處、大正日日新聞だけしか登載されてなかつた。而して教育の事業が國家の將來の大事業なる上からかゝる問題は寸時もすて置くべきものでない事と、頭の禿げた――實際には禿げて居らないのもあらうけれど、頭の中は禿げてしまつて居る――中等學校長など云ふ舊式教育者の言ひ相な事だと思つた。今の中等學校の校長などには唱歌や音樂の有がた味は勿論おわかりにならない事だらうから、唱歌廢止論も彼等百科辭書の教育者にはさもふさはしい御意見と白い頭をひねくり會つたにちがひなからうけれど、さても唱歌科の廢止が實際には實行されなかつたにしても、問題にのぼるだけでも、國家の大不詳事である。原首相の暗殺は一人の原氏が殺されて御氣の毒だが、國民の中堅であるべき澤山の中等學生が彼等無自覺な中等學校教員に殺されてどうなるものか。兎角中等學校長の如き者に、藝術中の藝術、藝術中特に高貴なる純粹の藝術がわかる者が居らない。起て天下の具眼者、若き教育者よ、蹴り飛ばせ、敲きつぶしてしまへ、かゝる似而非教育者の似而非教育を、大事な人間の子供が彼等殺人教育者の爪牙にかゝつてどうなるものか。

抑教育の主要部はその殆んど大半が目と耳とで出來るのである。而して目より入る教育的資料と方法乃至は觀賞は澤山にある。處で耳より入るものは唱歌をぬきにして果して何物があるか。吾人の感官の内でその最も高貴にして重要なる目と耳との二大機官の耳の教育を廢止して果して如何なる教育が出來るとおもふ。耳より入る教育は音樂の唯一つより他に何物もないのだ。

つい話が長くなつたが私の言はうとする事を述べるに先ちて之だけの事を附加して置く必要を認めた。但し右の事實が實行出來たか否かは私は知らない。一度大阪方面へ聞き合せ度いと思ふが尚かゝる機會を得ないのは遺憾至極であるが、若し實行されなかつたならば幸である。假令實行されなかつたにしてもかゝる問題が問題として議論せられると言ふ事は確に大正年間の大不詳事の一として原首相暗殺以上の問題である。京都市の中等學校(男子の)には音學科の設置しある學校は一校もない。之は廢止

したのではなくて最初から置かなかつたものである。東京市に於てもあまり澤山はない樣だ。困つた事である。近時何れの地方に於ても運動熱が盛になつて來た事は良い。そして殊に都會や地方の中等學校はもとより小學校に至るまで彼等生徒や兒童間に盛に流行し論談せられて居る。然るに、音樂ときては實に物さみしい感じがする。小學校に音樂科を置かれた事はよい事であるが、先づ困難な問題は教へる人がないと言ふ事である。師範學校卒業生にしてオルガンがかなりにひける人が何人あるか。歐米の師範學校では卒業生がソナタ位は樂にひける相である。小學校の生徒をして十分なる音樂的インテレストを與へんには先づ師範の唱歌教育を改めなければいけない。然るに我國の如く師範の唱歌教育ときては實にろくなものはない。之が根本に於て初等教育に於て音樂の發達しない最大の原因であるとおもはれる。殊に樂器教授と來ては殆んど良法案がないらしく、尋常小學唱歌がひける教員すらまれなのに至つては實に寒心するより他にない。

歐米諸國の中等學校が大變に進歩して居る事は今更申すまでもない事であるが、殊にその卒業生にしてソナタやソナチネの彈けないものはない位だと聞いても驚かざるを得ぬ。米國あたりの師範學校ではどしどしとカンタヽやオペラの練習をやつて居る相であるが日本では之に反しそんな事でもやらうものなら例の頭の禿げた校長連中は禿頭に湯氣をたてゝ驚く事であらう。日本でも中等學校はもとより小學校に於てもオペラやオペレット、カンタヽなどが大に流行せなければならない。流行どころではない、大に正教科として行はれなければいけない。歐米諸國では中等學校の生徒にして四五百人一團の合唱團なり管絃團が澤山に出來て居る。

第一に師範學校では小學校の唱歌が理解出來又は彈奏出來る樣になる事を以て能事終れりとする樣な事ではまことにおぼつかない次第である。音樂學校の生徒を教へるには音樂だけの知識でよいが、小學校の生徒を教へるには音樂の專門的知識はもとより更に教育者としての能力が必要になつて來る。さすれば小學校の唱歌教授は音樂學

校の教授よりも更にむつかしいのである。小學校の音樂を盛にする爲には是非とも師範學校のそれをもつと價値あらしめねばならない。

日本から歐米へ留學して先づ一番に困る事は音樂だと言ふ事である。音樂學校卒業生徒の音樂に對する知識と技能と位は國民一般の人か常識として知つて居らなければならないのである。英國あたりでは毎日百雷のとゞろく工場内で黑くなつて働いて居る職工等か一日の休暇を得て先づ何處へゆくかと言へば音樂會やオペラである。日本の職工などはどうであるか。彼等とても音樂は好まぬのではなからうけれども、彼等の最も好む音樂に對する理解も知識もない爲に。音樂家は歡迎せらるゝ事なく、したがつて音樂家は貧乏であるにきまつてゐる。かゝる次第で音樂は至つて未開であるが上に貧乏なる音樂家が研究の資なく、能力ある者とても遂に金に窮して前途延ぶべき能力も遂に延ばし得ざるに至るのである。音樂は繪畫の如く店頭に飾つて置く事が出來ない、又倉の中に藏つて置いて金の價が出るまで秘して置くわけにもゆかぬ。床の間に掛けて觀賞する事も出來ず、直ちに消えてしまふから觀賞者の野心を煽り、之を所有する念を起させる事も不可能なのである。だから之を私に藏しやうとする樣な人もなく、音樂家と言はゞ古今東西を問はず貧乏にきまつて居る。勿論藝術と言ふものは非常に金とか物質とかに關係が少ないものであり、決して音樂のみではないのであるが、音樂は音樂家自身の藝術であつて、他の觀賞者が如何程金を出しても自分のものにする事は困難なのであるから、之に莫大な金を出す人もなく、殊に我國の如き一般の社會の人々は音樂に對しての理解もなければ耳の感覺の發達して居らない民族に於てはその國で音樂家が生活に餘裕ある樣にならう筈はない。昔から佛敎の影響を受けて繪畫や彫刻は早くから發達し目に對する觀賞的知能は比較的所有して居る程度の多かつた日本人も、音樂と來てはテンとわからず、音樂と言はゞ直ちに野卑下劣な遊廓の歌や義太夫浪花節の如き「語り物」とおもひ、藝人と言ふ一種の卑下した言葉で藝術家を總稱する事になつて居つた。只畫家だけは昔から藝人とは申さずに學校の先

生や高僧の様に尊敬して居た。かゝる次第で日本人の音樂に對する能力は祖先代々先天的に缺けて居たとも言ひ得られない事はない位にまで理解がないのである。私がかつて歌劇の俳優に志した事があつた。その時私の友人や親類の者共が極力大反對をしたが爲に遂にその考へ止してしまつたが、今から思へばもしい事をしたものだと後悔して居る。その當時にあつては親孝行であつたかも知れないが、それは兎に角としてその時の友人知己親類の反對の理由は只一がひに藝人として卑下する事にのみ努力して遂に延びに延びたであらうと今から思ふ私の一念をひるがへさしてしまつたのであつた。之は只私の體驗の一部にすぎないが日本人が藝術に對する考は如斯淺はかなものである。爲之音樂に對しても社會の人々は一切同情を持つて居ない。古い骨董品や繪畫に數萬數十萬の大金を少しもおしまない富豪も、音樂に對しては何等の理解もないのである。音樂を盛にせんには一般社會の音樂に對する理解をより向上しより自覺せしめなければならないのである。

音樂を發達せしめるには西洋音樂を普及せしめなければならない。日本音樂とても良い處は澤山あらうけれども先づ第一に樂器が完全でないし、極言するならば日本音樂は語り物であるから樂器は只單に音樂の補助にすぎない。例へば義太夫や浪花節淨瑠璃などを見てもわかる通り觀賞者はそれ等の節や曲――つまりそれ等のメロディー――に依て感ぜしめらるゝよりも歌詞の文學的影響――文學的情緒又は文學的刺戟――によつて感ぜしめらるゝのであるから、換言すれば日本音樂は音樂としての一部分にすぎない。尙極言すれば文學を少し綾附けして聞かせる爲に簡單な平易な、幼稚な未開な樂器によつて補助するにすぎない。音樂的知能のない日本人はメロディーを主とせずして歌の文句の良い惡いや、悲しい淋しいうれしいなどの事を感じて居るのである。故に眞の音樂は樂器でなければならず、そんな立派な樂器や樂音は日本には絕對にないと言つてよいのであるから、今後教育的にも藝術的にも堅全なる立派な國民樂を作らうとするのには西洋音樂にその範を取らなくてはならない。つまり日本音樂

は獨立して純音樂、又はそれに近いものではなく、全然音樂としての獨立性を缺いて居る。殊に記譜法と來ては殆んどお話にも何もならない。謠曲の如きは音樂と言ふべきか否かはそれが嚴密なる意味に於て疑問であるが、廣義に言ふならば一種の音樂とも言ひ得られようかゝる幼稚な未開な音樂は一般の音樂を退歩せしめるばかりでなく、立派な藝術の進歩を防害するの他何等の價値なきものであり、ことに教育上の價値から言ふならばゼロである。

私は日本音樂の價値を認めない者ではないけれども、尺八の「ハロロロ」ではどうも感心が出來ない。眞にかゝる三味線や琴で以て將來の日本の——世界列强の一である我大日本帝國の——國民的音樂が出來やうとはどうしても想像がつかない。此處に新日本の大國民音樂は西洋曲に其の根本の範を採った、そして國民の性情に一致するものでなければならない。それには彼の有名な女優松井須磨子の演じたトルストイの「カチユーシヤ」の歌の如く國民一般に普及し、純然たる西洋旋律に立脚したところの日本音樂でなければいけない。かくてこそ眞に國民に共通した西洋式音階に立脚した國民音樂が建設されるのである。

カチユーシヤ可愛いや別れのつらさ云々、

と美しい旋律で歌はれる時、それにどれだけの暖みがあり人間性が象徴されてゐるか知れない。日本で出來たベニスのゴンドラの歌などの如く、

命短し戀せよをとめ、赤きくちびるあせぬまに云々。

と樂しいメロディーが流れる時、青年男女の心は血が湧き立つのである。女學校の先生がこの樣な歌を歌ふ事をどんなに一生懸命に禁じたって、今の青年男女が學校唱歌を忘れる樣なものは居ても之だけはおそらく忘れては居まいとおもふ。何故忘れないのだらう。今日の學校唱歌程家庭と沒交渉なものはなく、人間味のないものはない。音樂學校の古い古典的な作歌者の歌詞、殊に殆んど死文字とも言ふべき「天地のひたぶる極みなき」式の擬古文字を羅列した樣な歌詞にハイドンのクリエーションの曲をあて

がつて見たり、音樂としても文學としても乃至は藝術としても殆んど價値なき歌詞を作つて、泰西の名曲を加除改作して見たりして兎に角お茶を濁らして居る樣な學校音樂、そこにどんな藝術教育が出來るとおもふ。戀歌を教へてもらはない爲に、今の中等男女學生の心情が如何に五里霧中にあるかはカチユーシャやゴンドラの歌を知つて居て知らぬ顏をして居る處を以て見てよくわかるではないか。私は戀愛は頗る高貴なるものと思ふが爲に、學校に於ては整々堂々と戀歌を教へる必要があると思ふし、眞純な戀を象徴した唱歌は今後音樂家によつてどしどし作曲せられねばならない。

歐米先進國では大抵家庭の相當な家には樂器が設備してある。學校で習つても直ちに家に歸つて家族と相唱和する事が出來る。處で日本は學校に於て四角四面の、彼等被教育者に何等の趣味も感じもない、時には無價値な無意味なしかも窮屈な曲調を無理にさづけられ、家庭に入つては音樂的の設備何一つなき所で、叫び奴鳴るのである。眞に子供は可愛想でならない。讀本唱歌とか何とか、讀本の變な歌調に節をつけで見て、それで國民樂が建設されるものゝ思ふは大なる誤りである。

兎に角今後國民一般により藝術的な音樂を普及せしめんとならば女子の音樂に十分に注意する必要がある。女子は子供を養育すべき、人間に於ての至上の任務を持つて居るのであるから、先づ女子をして音樂の何物たるかを理解せしめ、大に興味を持たさしめて置く事は、將來國民樂の基調を作る上からのみならず、直接教育の上にどれほど近路であるか知れない。かゝれば女子ことに女學校の唱歌科の任務は實に責任大なりと言ふべきである。如何に國家が法律を以て命令し奬勵したつて好まぬものは好まぬ。被教育の心理に合はないものは法律や命令何にかならん。彼の文部省で定めて居る式次の唱歌の悲慘を見よ、「今日のよき日は大君の生れたまひしよき日なり……」の如き天長節の歌のメロディーに至つては非教育的極まる旋律であると言ひ得られる。御即位式の時文部省の懸賞に第一等に當つた「天地のむた極みなき」の如き歌詞でなければ文部省は採用しないのである。文部省は一般の社會の進歩にいつも二三歩後れ

て居るのである。

凡そ健全なる快樂を缺除する時は、人は常に何れか快樂を他に求めようために遂に不健全な快樂に入り易いのである。而して家庭に於ても主婦は常に家庭の慰安者となつて家族をしてその向ふ處を誤らしめぬ樣にしなければならない。それには音樂が最も大切なのである。女は愛の動物である。歐米に於ては音樂を心得ぬ者は下層の家庭に於てもないと言ふ事である。かくて歐米の家庭は如何に音樂的の美しいメロデイーが流れ一家團欒和氣藹々として居るかと想像できる。おゝそれに比しても殺風景なるは我國の家庭よ。氷の如き冷たき家庭よ。

第五章　學校の唱歌

第一　樂器の悲鳴

學校の唱歌教授にはオルガンがブウブウと悲慘な唸りを立てゝ響いて居る。果してオルガンと言ふ樂器はあの學校の教室の中に響いて居る樣な惡い音しか出ないものだらうか？　否々オルガンは大變に良い音を出す事が出來る樂器なのだ。何故か學校の教室が惡いのか？　オルガンが惡いのか？　何が故にあの悲慘な唸りを立てゝひゞくのだ。

オルガンは由來良い音が出る樂器なのだ。美しい聲を所有して居るのだ。然るにあの惡い――氣分の――音を出すのは、出す者が惡いのだ。オルガンを眞によく使用する教育者があらうか。オルガンの眞價を發輝せしめる教育者があらうか。教育者はオ

ルガンの良いハーモニーを出させる事が出來ないのだらうか。何處の學校にもオルガンの音は惡い音しか聞えないのである。伴奏を歌つて聞かせと言ふ教育者が居たのだ。ムーンライトのソナタを歌つて聞かせてくれとたのむ教育者もあるのだ。どんな音樂でも皆歌へるものだと思つて居るのだ。人間の口はそんなに便利なものではないのだ。重音を教授する時他の方の耳つをめさせて居る樣な教育者もあり、別々に數へる教育者もあるのだ。そして自分が師範學校あたりで習ひ覚はつた樣な歌を子供に教へて平氣で居るのだ。

オルガンは由來良いハーモニーの出る樂器なのだ。私は小中學校の樣に音樂上ボーカルばかりをやる場合にはピアノよりもオルガンの方が良いとおもふ。上手に歌へる樣になればピアノの伴奏も是非必要だ、が最初からピアノでやる事は考へものなのだ。ピアノにはピアノ獨特の特徴がありオルガンは又オルカン獨特の良い處があるのだが、ピアノよりもオルガンの方が餘程肉聲に近いのだから、先づ最初オルガンが良いと思ふ。

ピアノでもその通りだ。何處の學校へ行つてもピアノを腕力でたゝきつけるのだ。私の耳の音叉をもつてゆくと少しも調が合つて居らないのだ。廣い講堂の片隅の方に邪魔物の樣に置かれてあるのだ。そしてピアノの上等がありながら式のときのみしか使用し得ないのだ。時々生徒をその廣い講堂の片隅へ引きつれて行つて寒風身を切る冬のもなかにも、叫ばせて居るのだ。ピアノ使用法を知らないから腕づくでたゝきつけるのだ。ハンマーが折れたり絃が切れたり。實に樂器を虐待する事甚しい。代々樂器を虐待した證據にはあの悲慘な音しか出ない樣になつてしまつたのだ。私は或る人にたのまれてオルガンを見に行つた事もあつた。「私の家のオルガンは隨分に澤山の金をかけて購つたのにてんと良い音が出ない。」と言ふのだつた。行つて見るとそれは獨逸式の上等のオルガンである。一寸我々が常に見たり使つたりする事がむづかしい樣な上等だ。私の腕はオルガンを一目見て勇み立つた。「先生にひいてもらふと音がちが